考えたウマシカ

よりぬきウマシカさん
〜なめあいの妄想編〜

# ウマとシカとの なめあい!?

弦楽器イルカ ＋友人

# 『掲載内容一覧』

・掲載内容一覧
『空に宛てた手紙』
『飾りじゃないのよ アイドルは』
『恋する原発2』
『お客様の中に、____はいらっしゃいませんか？』
『竜の島国』
『天誅～復讐の黒天使～』
『原発戦隊ハイロマン』
『こんな泡沫候補はイヤだ！』
『最優秀五輪賞』
『天×誅 THE MOVIE ～今宵、お前にXを～』
『雑味しんぼ』
『こんな記者会見はイヤだ！』
『ソウジ・キッド』
『悪代官におれはなる!!!』
『汚染水バケツチャレンジ』
『GZばっか』
『寄生獣　予告編』
『イケメンに税を！カツラに補助金を！』
『商品なのよ 涙は』
『雑パンⅢ世 ２時間スペシャル』
『新しい道徳　その１』
『妄想の新旧・直木賞対決』
『新しい道徳　その2』
『モヤモヤ格差』
『逃走という闘争を通そうとする言葉』
『春ゲナイ』
『オビラー』
『フミ嫌ート』
『新しい道徳　その３』
『ウマシカうどん』
『巨人は飲み物です』
『別冊について一言』
『ドラマ化がミポリンって……』
『猫型ロボット作ってドラえもん入れず』

『卵と壁のスピーチ』
『未来妄想図Ⅰ』
『ゼロ円通貨』
『ブラックフラワーチャレンジ』
『コピーロボット』
『アイネクライネ読解』
『理想の恋愛曲線』
『ラピュタ２』
『誘拐ネタ』
『将棋の漫才』
『労働と努力』
『性のボヤ騒ぎ』
『ポケ檬、リリースだぜ！』
『これは本ではありません。檸檬です』
『メモ欄にお困りの方へ』
『ニンジャソウルのセンス・オブ・ワンダー』
『ドラゴンボールGO』
『リアルなゲーム表現』

# 『空に宛てた手紙』※第二回　『1Q84』と丸刈りの誕生より抜粋

　話が引っパラレル方向に逸れた。まあいいや。もっと逸れついでに、てか一気に逸らすけど、新しいサイトの案を考えた。『1Q84』も「力を集めて」だし、ツイッターとか世界は繋がる方向へ進んでるけど、過度に繋がりすぎて飽きたら、一旦立ち止まる方向にも進むと思う。そのときに、そこまで繋がりたくはないんだけど、でも繋がっていたい、と思えるようなサイトがあればいんじゃないかと。

　題して、「空に宛てた手紙」。
　たとえば、フェイスブックやらで昔の恋人と会って云々とかあるらしいけど、そこまでじゃない、連絡取りたい訳じゃないし、そもそも今どうしてるか知りたいって程でもない。
　でも、何らかの想いがあって、それを誰かに伝えたい。本人に直接届いてもいいけど、別に届かなくてもいい。または、想いを表に出すことで、実際の告白に踏み切れるかもしれない。
　そこで恋文部門、手紙部門と二つあって、手紙部門は、友達や家族、故人とかに宛てて手紙を書ける。
　そうやってみんなが書いた手紙をおしゃれなデザインで掲載する。誰でも閲覧可能。本人に届くかもしれないし、届かないかもしれない。目的はそれを読んで、どきっとする人、ほっとする人、いろいろな想いを抱くこと。俺自身、そのくらいなら書きたいことがあるような気がする。
　更に詳細を書くと、気に入ったら「いいね」みたいに、「届け！」切手（スタンプ）を送ることでポイントが加算されて、ポイントの高い人気ある手紙は、どんどん上位にランクしていく。
　ただ、手紙は通常一ヶ月くらいで整理されてタンスにしまわれるので、一ヶ月過ぎたものはランクから外されていく。もちろん、検索で過去の手紙も探すことができる。新着順とかでも見ることは可能。
　読んで良かった手紙には、返信を送ることができる。返信者は受取人、差出人の二種類から自分の立場を選んで入力する。本当の受取人（想われ人）が「自分です」って名乗ったり、あるかもしれない。
　ただ、誰でも作成、返信できるわけじゃなく、手紙の差出人、受取人は登録必須にする。メアドとか簡単な登録で、基本匿名、基本無料でできればいいと思う。
　また、差出人が手紙のＵＲＬを誰にでも送れる機能も付ける。例えばラジオのＤＪにオンエアーで告白を頼む感じで、自分が書いた手紙のＵＲＬを相手に直接送ることもできる。
　任意で情報を入力する項目もある。あなた／相手のイニシャル、今のあなたの年代、出会った当時の年代、あなた／相手　の好きな　本／映画／音楽／趣味、出会った場所、〇県〇市、が入力できる。
　絶対守るルールは、個人情報保護。当人以外で、簡単に個人を特定できるような内容は書かない。また、感謝の手紙であること。恨み言、悪口にならないように。内容によっては、管理者が独断で削除できる。

どうかな？ たとえ既存であったとしても、新しくやったらおもしろいと思うんだけど。他人の手紙とか読んだら面白そう。バレンタインにちなんでる訳でもないんだけど。

あとこれ、『1Q84』の内容にもちょっとかぶるよね。何年も会ってない人たちの世界が、逸れてるようで繋がってない？ さすが春樹。収斂されたわ。

　んでもうひとつ。今回の目玉企画。小説のあらすじを考えました。特濃バージョンでお楽しみください。

　報道カメラマンの夢に挫折し、しがないフリーのカメラマンを続ける秋元は出版社の依頼を受けてアイドルのスキャンダルを追跡し、ついに独占スクープを掴む。そんで丸刈りが誕生する。物語はまさに今ここから始まる。
　自分がアイドルを追い込んだことに罪の意識を感じながらも、ファンの報復を怖れ自宅へ戻らず、地方を取材する秋元に、一本の電話が入る。「警察の者だが」。会って話がしたいと。警察と聞いて警戒しながらも、話を聞く決心をする秋元。
　警察は、アイドルグループの裏側を追っていた。実は埼京（最強）連合という裏組織と密接に結びつくアイドルたち。マスコミや財界、政界に食い込むための破廉恥な接待の数々。
　ここで割かれるページ数たるや。猥褻描写でワシ掴まれる読者たち。そして悶々とする秋元。「俺も接待されてえ！」
　いや、方向性を間違えた。軌道修正。
　警察は秋元に協力を依頼する。懐から一人の女の子の写真を差し出す。このアイドルの裏接待をスクープしてほしい、と。
　秋元も業界人の端くれとして、その娘の名前は一目で思い出せた。佐藤とさ。「前から後ろから応援してね！」のキャッチコピーが初々しい、今最も旬な売り出し中のアイドルだ。
「彼女まで接待を？」「そうだ。彼女は特に業界では具合が良いと評判になっている。具体的には……」「聞きたくない！ これ以上悶々とするのはまっぴらだ！」
　頑なな拒絶に黙り込む警察の人。気まずい感じ。ここの気まずさをどこまでリアルに表現できるかが、この小説の肝だね。まぁそれはどうでもいいとして。
「君はもう、あのスクープを撮った時点でこの件に片足を突っ込んでいるんだ。気づいてはいないだろうが、裏社会は君を追っている」「なぜ？」「あの坊主事件、あれは見せしめだ。ここから裏社会との関係を暴くつもりなら、ただじゃおかないと業界に知らしめるための」「あの坊主にそんな意味が？」「たぶんね」「たぶん？」「大体そういう感じだと思うって意味の、たぶん」「言葉の意味は大体知ってる」「たぶん？」「いや、ちゃんと」
　また脱線した。
　アイドルを金ヅルとしか考えず、女の子を丸刈りにまで追い込む裏組織に憤りを感じる秋元。「撮ってやる。その証拠、掴んでやる」
　警察からの情報をプライドから拒み、自分の足で聞きこみ、とさの接待現場を捉えた秋元。しかし、とさは破れた服でホテルから飛び出す。慌てて後を追う秋元。
「あたしやっぱり、接待なんてできない！」「それで政治家をひっぱたいて逃げてきたって言うのか？ でも、これがはじめてじゃないんだろ？」「はじめてよ。ずっと断って来たの！」「なに？」

　ひょんなことからとさをかくまうことになる秋元。二人を追う黒スーツの男たち。徐々に明らかになる裏組織の陰謀。そして警察の裏切り。
「なぜ、警察のあんたが俺らを殺しに？」「なぜって。これから死ぬヤツに教えるワケないじゃん。２時間ドラマじゃあるまいし」「待ってよ。次はちゃんと接待するから。この人は関係ないでしょ？」「今更、自分勝手なお姫様だ。接待はしない。でも恋愛はしたいと。安っぽすぎて使い捨ての駒にもなりゃしない」「なぜとさのスクープを俺に追わせた？ 殺すつもりならはじめからいくらでも」「だから、教えないってばさ」
　次の瞬間、警察が振り下ろした警棒を、身代わりになって受ける、丸刈りの人。
「あたしがこの男を抑えるから、早く逃げて」「そんな、丸刈りで……」「いいから！ あたしはこいつを許さない。アイドルは人間なの。人間だから恋したり失敗する！ あたしはマネキンじゃない！」
　丸刈りの人に助けられ、その場から逃げ出す二人。寄る辺ない逃走の末、辿り着いた安宿で身を寄せ合う二人。
「あの丸刈りのコね、あたしと仲良かったんだ。あのコも裏接待を拒んでて。でも合コンとかは好きでね。そんなのやめときなって言ってたんだけど。裏接待を拒んだ制裁でスクープを売られたのかもって、前に言ってた。…気づいたら、丸刈りにするしかなくて。変だよね、アイドルって」「…俺が、撮ったんだ。あのスクープ。出版社の依頼で」「え！」「君のスクープも奴に依頼されてた。でも君は接待しなかった。まさかそれで殺しに来るとは思わなかったが。俺の責任だ。君まで巻き込んで」「それは違うよ。あたしもあのコも、自分で決めてここまで来たんだから。…いずれこうなってた。まさかこんな裏のある世界だとは確かに思わなかったけど。でも秋元さんはあたしを命がけで助けてくれた。ありがとう」「いや」「それに、あたしがもしホテルで接待してたら、アイツは殺しに来なかったかも。秋元さんも狙われずにすんだのかもしれない」「それはどうかな。俺ははじめから消されるリストに入ってたような気がする。…しかしアイドルってのは大変な商売なんだな。そういや、営業マンの親父がよく言ってたな。商売ってのは商品を売るんじゃない、魂を売るんだって」「…じゃ、アイドルも一緒ね」「ん？」「昔々あるところに、佐藤とさという、夢見るアイドルがおりました。彼女は、売れる分の魂を残らず売り払ってしまい、最後にはすっかり、空っぽのお人形になってしまいました」寂しげな笑顔のとさ。
「……とさ」「…秋元さん」「いや、名前じゃなくて」「え？」「いや、お人形になってしまいましたとさ。の、とさ」「…なにそれ、おっかし」小さく笑う、二人の目線が切なく交差する。「…とさ」「それはなんの、とさ？」「いや、名前の」「え？」 甘い沈黙の中、見つめ合う二人を引き裂く着信音。
「誰だ」「読者だよ。取り込み中失礼するが、私が今読んでる童話の話をしよう。真実を含んだ残酷な裏側と、書き換えられたお涙頂戴の表側。君ならどちら側を読みたい？」「何の話だ？」「さて、昔々あるところに、カメラを持った貧乏人とアイドルのように美しいお姫様がおりました。二人は禁断の恋愛に堕ちたが故、人目を避けて逃走し、挙句の果て無理心中に追い詰められました。…とさ」辺りを見回す秋元。「…監視してる、ってことか？」「いやなに、これが童

話の書き換えられた表側だよ。ワイドショー好みのネタだろ？」「何が言いたい？」「童話の国を守る警護団には、闇接待で骨抜きにされた裏勢力と、それを潰したい表勢力の暗闘があるんだ」「警護団？ …警察か？」「さてね。それより君が知りたがっていた童話の残酷な裏側も聞かせてあげよう。もし、政略的な闇接待を断り続けた姫君と、カメラ一丁でスクープを狙う貧乏人が心中したらどうなるか。裏側を知る者は、見せしめの殺人だとすぐ気づくだろう。残された他の姫たちや貧乏人は、裏勢力の言いつけに逆らえば同様の死が待つことを自ずと悟る、ってオチだ」「…それが、俺たちを殺そうとする理由か？」「ただの童話だよ。だがこの童話には続きがある。ご存知のように我々読者は、登場人物である君たちを逐一見守ってきた。その素晴らしい活躍に免じて、新たな展開を書き加えよう。姫君はカボチャの馬車に乗って無事に保護されました。それと引き換えに、貧乏人は来週、姫たちが強制的に駆り出される秘密の船上舞踏会に忍び込み、怪しげな交際現場を撮影しました。…とさ、も付けようか？」「俺が断ったら？」「断らないよ、君は。これはクローズドな童話だ。登場人物は少ないほうがいい。ほら、名前がたくさん出てきたら、覚える読者も大変だろう？ だから主人公の君が適役だ。それに君が断れば姫君はいずれ元の監獄に引き戻される。裏の勢力は強大で、君たちだけで逃れられる術はないからだ。それはいかにも悲劇的な結末だが、味わうのは我々読者ではない。君たち登場人物だ。つまり、待ち受ける悲劇から姫君を解き放つ魔法は、君の腕でもぎ撮るしかない。もちろん、君たちがバッド・エンディングを望むなら話は別だが」「…今まで俺ととさが近づくように、わざと泳がせてたってワケか」「確かに一度芽生えた情は、強い絆を発揮するものだ。しかしとにかく、君はよくやっている。ぜひこのまま、ハッピー・エンドを迎えてほしい。我々読者が筆を加えれば、更にゴールは近づくだろう」「ひとつ確認するが、ここにいる姫はちゃんと保護するんだな」「仰せのままに」

電話の主に案内され、警察の表勢力に保護される、とさ。「秋元さん、行っちゃダメ！」「なに、いつもの日常に戻るだけだ。……ちっ、悔しいが本当だな」「え？」「いや、なんでもない。それじゃ」

パーティ会場である豪華客船に忍び込み、プールや客室で行われる驚愕の接待現場を目撃する秋元。甲板に設置された大型ディスプレイを背に、全裸で踊るアイドルたち。決死の撮影に成功するも、厳重な警備に気づかれ一気に追い詰められる。万事休すと思われたそのとき。

上空からヘリコプターが現れ、とさが秋元の名前を呼ぶ。次の瞬間、ディスプレイ装置にはアイドルと権力者との闇接待を暴露した、とさの告発動画が映し出される。全世界へ配信され、船上でも映るように工作されたのだ。その隙に秋元は危機一髪で船上から救い出される。

その後、数人のアイドルと権力者がスクープされ、そこで手打ちとなる。二人の活躍により、「多数の権力者の弱みを握ってコントロールする」という表勢力の目的は達成され、秋元は夢であった海外での報道カメラマンへの道を掴む。とさはその後もアイドルとして厳重に警護され、活動や言動を警察に管理される存在となる。

復帰後のライブ会場で、とさは大勢のファンに向かって挨拶する。

「私は、ファンの方一人ひとり、そう、あなたに、恋しています。あなたが、幾多の困難を乗り越え、今そこで、同じ時を過ごし、同じ空の下、同じ空気を吸っていること、生きていることを

想うと、とてつもなく温かい、大きな喜びを感じます。だから、他の誰にも、浮気なんてしません。あなたに恋するアイドル、佐藤とさは、前からも、これからも、ずっと、ファンのあなたにだけ、想いを募らせ続けます」
　鳴り止まぬ拍手と歓声を浴び、彼女はアイドルとして自然な笑顔を見せる。秋元は回想する。ヘリコプターの中で交わした、とさとの最後の会話を。
「あたし、もうイヤだ。秋元さんを巻き込んで、こんな苦しむならアイドルなんてやめたい」「泣くな。君はアイドルだ。アイドルが売る魂は、涙じゃない。アイドルなら、笑顔に魂を込めろ。ほら、昔のアイドルも言ってたろ。涙は飾りじゃないって」「あたし、アイドルやめたい。秋元さん、一緒に……」「悔しいが、君も俺も魔法にかかって、ヒロイックな童話の世界にちょっと迷い込んでただけだ。魔法が解けても君はアイドルだが、俺は王子じゃない。ただの貧乏なカメラマンだ。姫君の幸福を見届けたら、黙って荒野へ走り去る端役だ。ただ最後に、そうだな。じゃ姫君、私めにひとつ褒美の品を賜りくださらんか？」「なに？」「その笑い泣きの素顔を撮らせてくれ。アイドルじゃない、とさって女の子の笑顔を俺だけの家宝にするよ。だからこれからは、人前で涙を見せないと約束して」「…はい」
　彼女の写真を懐にしのばせ、秋元はそっと会場を後にする。アイドルは涙を見せない。素顔は大事な人の心にだけ、届けばいいことを知っているのだから。

　的な感じ。燃え尽きたよ。一本書き切った。この後「実はアイドルたちは全員、丸刈りのアンドロイドだった」ってSFオチで大どんでん返しっていうね。嘘だけど。
　やっぱ今世紀は、あらすじ文学の世紀だと俺は勝手に思うね。言いたいとこだけきっちり書いたら、これ以上に手っ取り早い物語はないとひとりごちるね。もしちゃんとした小説版の方を読みたかったら、Uが補完して書いて。後はまかしたから。
　結論として。俺はこれ以上関わらない方がいいな。いろんな意味でアンタッチャブル。これ書き切ってそう思った。俺として丸刈りの元は取った。お釣りが来るかはお客さん次第だけど。

　というわけだが、大マジはここまで。それでは、別な話をしよう。
　まず、またやってしまった件。例の「俺ならこう書く菌」が流行のウイルスのごとく脳内で繁殖しました。しかも今回の題材は二つね。
　一つ目は、高橋源一郎『恋する原発』を読んで思いついたこと。「魂込めて書いたのに誰も言及してくれない」って源一郎がラジオで拗ねてた下ネタ満載のアダルトビデオ文学なんだけど。60歳超えた文学界の重鎮がここまでチャレンジングな作品を書いたってことは素直にすごいし、若い作家は胸を借りるつもりで同じ土俵に上がって一番くらい相撲とってみろと感じた。
　というワケで、ここから俺が頼まれてもないのに勝手に一人相撲とるから。だって源一郎、ラジオで「間違ってても発言したほうがいいよ」って言ってたよ、俺に。いや、あれ絶対俺に言ってたって。だって電波系だから、俺。源一郎、責任、取ってね！（ラムちゃん風）
　まず俺が編集者だったら、物語としてよりシンプルな『恋する原発2』を、一刻も早く源一郎に書かせるね。ストーリーは、最近のAVではホームレスやら漁船やら世界中の原住民やらに現地で会ってセックスする「ご当地モノ」的ジャンルがあるんだけど、それを下敷きにして、AV女優が原発行って周辺に暮らす作業員をナンパして三人くらいと絡む、っていう展開にする。AV女優の過去、監督の葛藤、単身赴任の作業員とか悩みはいろいろあるだろう。それぞれの生い立ちとか背負ってる思いに焦点を当ててゆっくり物語を進行させ、最後のセックスシーンで、陽の目を見ないAV女優と作業員の気持ちが重なるって絶頂を描けたらかなりグッとくる仕上がりになると思う。マジックミラーの車で、原発の真ん前でね。これ、うまくいけばノーベル文学賞を春樹の横からかすめ取れんじゃないかな。ないか、それは。
　あと、原発作業員の特別ドラマをテレビでまたやるみたいだけど、震災時じゃなくて、むしろ今の彼らを日常生活や恋愛に焦点当てて「月９」で放送してほしい。もちろん、途中で誰か作業中に亡くなるの。それを乗り越えて成長する主人公たち。タイトル『核猿』。結構マジなんだけど、どう、この大一番？ 源一郎、責任とってくれるかな。まあ無理か。
　そういえば『恋する原発』内でナウシカについて、原作の漫画をなぜか映画って書いてた。あれ、「全部妄想です」って印でもあり、もっと話題になって完全版映画作ってって願いなんだろう。世間的にはナウシカ漫画版全然知られてないから、今更でも紹介して意味はあんだろうね。そういえば震災時、エヴァも〇号機とか暴走とか臨界点突破とか、直接的に連想したな。

『お客様の中に、____はいらっしゃいませんか？』※第四回　『恋する原発２』より抜粋

---

　んでもう一つは、このサイト内で見つけてしまったある電子書籍の創作コンテストなんだけど。俺もつい後出しじゃんけんで思いついてしまいました。お題は、「お客様の中に、____はいらっしゃいませんか？」って言葉を穴埋めして使用すること。時間は、1時間15分以内。面白い作品がたくさん載ってたよ。
　俺も大体時間内で書いたつもりだけど、きっちり時間計ってない上、本当に後出しだから卑怯だし、そもそもその人らも俺なんかには書かれたくないだろうけど、思いついたらどうしようもなく書いてしまい、かつ載っけちゃう、だらしなく不遜かつ嫌味かつ失礼な俺。ごめんなさい。橘いずみの『バニラ』以上に本当にごめんなさい。ちなみに今、榊いずみっていうみたいだね。知らなかった。これ最後に添付するね。
　今回はこんな感じ。どうかな？

※以下 お題小説 添付
「お客様の中に、より客っぽい客の人はいらっしゃいませんか？」
　舞台上から、サングラスをかけた初老の男が客席に向かってそう呼びかける。
　他でもない、それが今年で３０周年を迎えた「客っぽくていいともコンテスト」の幕開けを告げる、恒例の掛け声である。となれば、客席は当然、一斉にこう答える。「そうですね！」
　いつもの掛け合いを合図にして、客席の客たちの我こそがもっとも客っぽい客であるというアピール合戦の火蓋が切って落とされた。
「ええー？」大物ゲストのトークタイムが終了であることに不満気な声を上げる客っぽい客。
　よく柿を食べる客っぽい客。
「あれ、この席、この番号で合ってますよね？」自分が座るはずの席に誰か違う人が座っていることを、さりげなく周囲に知らしめる客っぽい客。
「ニッポン！ ニッポン！」大声で声援を送りながら小さな日の丸を振りつつも、自分が映っている大型モニターに気づき、今度はカメラに向かって大げさに日の丸を振る客っぽい客。
「あ、すみません」後ろの席の人に一度謝ってから座席を少し倒すフリをする客っぽい客。
「ヒーヒッヒ！」周囲より先んじて大きな笑い声を上げることが生きがいの客っぽい客。
「あれ、この席、この番号で合ってますよね？」アドリブが利かない客っぽく、他の客っぽい客とかぶってしまう客っぽい客。
「カシャ」自分の目で見るよりも先にスマホで撮ってしまう客っぽい客。
「zzz……」暗くなるとどうしても寝てしまう客っぽい客。
「エックス！」手をバッテンにして飛ぶ客っぽい客。
「白、ん～、やっぱ紅」赤色の札をあげて野鳥の会の人の集計を待つ客っぽい客。
　とにかくよく柿を食べる客っぽい客。
「あ、これ柿じゃなくて、牡蠣だった！」素人っぽいベタな駄洒落を狙って牡蠣を見せびらかす

、客っぽい客。

優勝はもちろん、それでも黙々と柿という柿を食べ尽くす客っぽい客である。毎回そうだ。今回は12個食べた。その数字が持つ中途半端な大食感も、より客っぽいとして評価されたのは言うまでもない。

そして何より、その一部始終を舞台上からぼんやりと眺める黒いサングラスの人の、客以上に客然とした仕事しないオーラこそが、このコンテストが30年間続いてきたもっとも大きな魅力なのだから。

# 『竜の島国』※第八回　『想像ラジオ』と斬新な王道より抜粋

　俺の記憶では10年以上前、ある文芸誌で「なぜ人を殺してはいけないか？」という問いに文化人が回答する特集があった。若者でもわかるように答える、といった趣旨だったと思う。
　それ読んで、俺はピンとこなかった。違うだろ文化人、この程度か、ってがっかりした。そのとき俺が考えた答えはだいたいこんな感じだった。
「いや、全然いけなくはないよ。生物ってもともと弱肉強食だし。どんな行為もしてはいけないなんて制約はない。その証拠に、戦争とか正当防衛とか、人を殺すことが法的にも倫理的にも許容される場面はある。殺しても、仕方ない。
　ただ大抵の場合、殺人罪を犯したらあなたは辛い思いをする。法的な罰という苦痛や、己の罪悪感に苛まれるだけじゃない。最も重要なのは、被害者を慕っていた人々から恨まれる辛さだ。親、子ども、兄弟、親戚、友人など、被害者の関係者が多ければ多いほど、行き場のない悲しみがあなたにぶつけられるだろう。彼らが被害者と歩むはずの未来まで、あなたは殺してしまったから。つまり殺人とは、関係者の将来も殺すことだ。更に言えば、あなたを慕う人々をも悲しませ、将来を奪うことになる。（これは自分を殺す自殺も同じだ）
　戦争や正当防衛という非日常であれば、こちら側の自分たちを守るために戦った結果と自己正当化して、被害者や関係者を心理的に無視できるかもしれない。しかし日常内の殺人では、法的な責任だけじゃなく、たくさんの他人の将来を奪った責任を背負いきれず、あのとき殺すべきじゃなかったと、いずれあなたは後悔することになる。
　だから、人を殺してはいけない。必ず後悔するから」

　さて、こんな賞味期限切れの文章書いたのは今回考えた物語に関係があるからなんだけど、いちいち説明なしで以下にあらすじを掲載します。

　竜暦2O13年。そこは、竜の使い手たちが政治を司る世界。
　先の大戦で小島国は、大国の竜の炎で焼き尽くされ、たくさんの死者を出し敗戦国となった。
　その後、小島国は侵略者のレッテルを貼られると共に、竜の使用を禁じられ、大国が持つ竜の傘で防衛される見返りとして、大金を徴収され続ける。更に半島国が捏造した歴史を学び、半永久的な謝罪と賠償を要求される現状に、青年は憤慨する。「半島国の盗人どもめ。小島国から出て行かないなら皆殺しにしてやる！」
　ある日、青年は同い年くらいの女性が悪漢に絡まれている場面に出くわし、得意の小島国拳法で悪漢を追い払う。
　恐怖でしゃがみ込む女性を置いて、名前も告げず立ち去ろうとする青年。
「待って！」腕をつかまれ振り向くと、女性の潤んだ瞳とその可愛らしさに目を奪われる。御礼にと、強く請われるがままに携帯番号を交換するがその後、連れて行かれた半島国料理店に、青年は戸惑う。
「気に入らなかった？」

「すまないけど、半島国料理は苦手だ」
「そうなんだ、残念。ここね、あたしの親戚がやってるお店なの」
「…ってことは、君は半島国人か？」
「半分ね。ハーフなの。お母さんは日本人。おじいちゃんが20歳のときに小島国に移住したから、あたしで3世代目。みんなもう小島国で暮らしやすいように帰化しちゃったけど、あたしも20歳になって改めて、半島国のルーツも大事にしたいなって思うようになったの」
「…俺は、半島国人は嫌いだ」
「え？」
　彼女の瞳に真正面から見据えられ思わず、傷つけぬよう言葉選びにあたふたする青年。
「いや、君は、ハーフだし、帰化してるし、それは、いいと思う。でも、小島国で生まれた誇りを持ってほしいっていうか、もう半島国なんか忘れて、小島国人として国益を優先するって言うか……」
「あたしは小島国の誇りも、半島国の誇りも、どっちも持ってるつもりよ。素直に、二つの国が仲良くなるために協力したいって思う。双方にとって一番の国益ってそうじゃないかしら」
　初対面でもある彼女に、反論すべきか迷う青年。
「俺は、両国の国益が一致することはないと思う」
「どういうこと？」
「あいつらは小島国にたかるハエだ。帰化しないで特権を得てるハエは半島国に送り還したほうがいい」
　怒り出すかと思ったが、彼女は少し考えたような顔で青年の顔を見つめている。
「…特権？」
「ああ。税金とか、生活保護とか」
「あたしには、帰化してない友人も、半島国からの留学生も、もちろん小島国人もいろんな知り合いがいるから、みんなが仲良くなってくれれば、あたしも一番生きやすいって思う。それに少なくともそんな特権得てる友達はいないと思うし、なにより帰化しないのは、ちゃんと知ってほしいからよ」
「何を？」
「あたしたちがここにいるってこと。既に小島国人の100人中2〜3人は、戦後に住み着いた半島国人か帰化人がルーツなの。でもたとえば、小島国人を47都道府県に分けて特色や方言を誇るバラエティ番組は当然のようにあっても、50人に1人以上いる半島国にルーツを持つ人々の現状を、真正面からとらえる教育をこの国はしてこなかった。ここで帰化しちゃったら、最初からいなかったことにされちゃう気がする」
「…でも君は、帰化したんだろう？」
「だから逆に、半島国のルーツも大切にしたいって思ってるのよ。それにね……」
　そこで彼女はなぜか、可笑しそうに笑い出した。
「どうした？」
「あなたさっきあたしを助けてくれたでしょ？ あたし、大学サークルで国際交流の活動してるん

だけど、あの人に半島国に帰れって言われたから、この国に住むのにあんたの許可はいらないって言い返したの。そしたらあんな感じになっちゃって」
　イタズラっぽく笑う彼女に、言葉をなくす青年。
「あなたが言うように、もし不公平な特権があるなら、それは制度の問題でもある。だったらオープンに話し合って解決すべきじゃないかしら。憎むことで制度が変わるワケじゃないから」
「でも歴史を捏造し、反小島国教育してるのは半島国だ。俺は小島国民として半島国を許すことはできない」
「…ねぇあなたって過去に、半島国人に何かされたの？」
「いや。ただ、社会悪が許せないだけだ」
「ん〜」
　彼女は首をかしげながら、何かを考えている。そして真剣な眼差しで、青年に語りかける。
「そうかしら。あなたはたぶん、知ってほしいのよ。
　この国に限らず、全ての平和は多かれ少なかれ無知に支えられていると私は思ってる。どんな問題も、知らなければ起こっていないことになるから。逆に問題を知ってしまえば、平和は崩れてしまうかもしれない。そこに怒りや憎しみが生まれるかもしれない。
　でもこの国の無知なる平和に対して、足元にある隠された問題をあなたは訴えたいんじゃないかしら。
　だってあたしもそう思うもの。本当に起こっていることが何なのか広く追求してほしいし、一人でも多くの人に知ってほしい。でもあなたから見える問題と、私から見える問題は、大げさに言えば海を挟んで反転しているのかもしれない。それは今まで誰も本当を明らかにしてこなかったから、本当がいくつもあることになってるからだって思うの」
　彼女が青年に向けた真っ直ぐな意見に対して、青年も真剣に答える。
「いや、本当は俺が知ってるひとつしかない。半島国に騙されてるだけだ」
「騙されてるとしたらまず、どれが騙しでどれが本当か、そこから話を始めたらどうかしら」
「話し合う必要なんてない。半島国人は追い出すか、皆殺しにすればいい」
「本気で言ってるの？」
「…だとしたら、なんだ？」
「もし本気なら、まずはあたしを殺しに来て。じゃ、来週また会いましょ。ここで」
「え？」
「あたしは殺される側の味方をしたいの。来週あたしをまだ殺す気がなかったら、代わりに一品だけここの料理を食べてね。そうやってあたしを殺さずに毎週会い続ければ、あなたはどんどん半島国料理を好きになるってワケ」
　呆れて青年は二の句が告げない。
「バカじゃないのか？ 俺が毎週こんな店に来るはずない」
「ここの料理は最高なの。一度食べて嫌いになるワケがないわ。ねえ、あなたがあたしを殺すのが先か、あなたが半島国料理を好きになるのが先か、勝負しない？」

翌週、青年は半島国料理店には出向かない。ただ、半島国にルーツを持つ彼女と直接の交流を持ってしまったことで、青年の中に葛藤が生じる。
あの料理店で自分を待っている彼女の姿を考える。彼女の真っ直ぐな視線が自分に向けられていたことを思う。彼女は俺に何を知らせたいのだろう。そして俺は彼女に何を知ってほしいのだろう。そこまで考えてとっさに打ち消す。
くだらない。これ以上知るべき事柄などない。この際本気で、彼女を殺すべきなのかもしれない。でなければいっそ、簡単に迷う自分自身を殺してしまおうか。
そのとき、とてつもなく大きな横揺れが起こる。地震直前の低い轟音に似た、大気を震わす竜の咆哮が響き渡る。
ＴＶをつけると、国籍不明の竜の一群が小島国に攻め入ってくる映像が映し出される。竜の羽ばたきが巨大津波を起こし、街が海に飲み込まれていく。竜の口から吐き出された炎が街を焼いていく。
そのとき、着信音、見るとディスプレイに彼女の文字が。出ると、「助けて」という叫びで電話が断ち切られる。
青年は思わず立ち上がり、迷う余地なく外へ飛び出して行く。

ここまで書ければ終わり。
謎の竜の正体とか襲う理由は、特にあってもなくてもいいと思う。青年や女性が抱える背景や悩みも詳しくは書かない。話を狭く限定したくないから。
ちなみにこの企画の最大の目玉は、全部の設定を反転させた韓国語版を同時発表すること。つまり韓国語版の舞台は半島国で、青年は半島国出身、反小島国運動をしている。女性はハーフで、両国の友好に貢献したいと思っている。他の細かい設定も必要な部分は直す。
こういう類の企画があったら、結構面白いんじゃないかと考えた。
人生は暇つぶしで、巨万の富を得ようが、貧乏暮らしをしようが、一度に感じられる幸福感には上限も時間制限もある。快感だって過ぎれば苦痛になる。快感や幸福感だけを延々と感じ続けながら生きる人間はいない。
それならば与えられた人生の枠の中で、できるだけ幸福に文化的に暇をつぶしたいと俺は思ってる。そこで文化に対する俺なりの答えとして、バッシングに与しない物語で暇をつぶそうと考えた。あとはじめに業業言ってたのは『GO』に似ちゃったからなんだけど、『凶気の桜』っぽくもあるから窪塚恐るべしって思う。

# 『天誅～復讐の黒天使～』※第十一回　『帝都物語』とオリンピック憲章より抜粋

　その一、ドラマ『天誅』の幻のボツ回を勝手に妄想してみた。
　タイトルは、「～復讐の黒天使～」。
　場面は京本の古武術の道場から。「素敵な香りがする」と親衛隊のおばちゃま三人組に囲まれる京本。
「最近、日本古来のお香について勉強しているんです。今たいているのは安眠効果と、少し催眠の効果もあるお香なんですよ」
「まぁ、まるで夢の中にいるみたい。先生と一緒に夢の国へ行きたいわ～♡」と、おばちゃまがたメロメロ。
　場面変わって、スナック「天守閣」。テレビでは総理の祖母が亡くなったニュースが放送されており、ミツ子が総理（三ツ矢の一人二役）に似ていると話題に。
「えー？ 似てないわよー。ん、オッホン。私には夢があります。オカマによるオカマのための景気対策こそ、この国に最も自信を取り戻す活力になるのであります！」
「ヨッ！ ミツ子総理。良い夢みせてもらったよ、アバヨ！」
「へえ。総理のばあちゃん、亡くなったんだ」とピン子。
「そうなのよ。どうも総理は子どもの頃からエライおばあちゃん子で、全く頭が上がらなかったらしいわよ」と近所の情報通のおばちゃん。
　次いでテレビは変わって、2週間前に原発の作業員が、作業中に心不全で亡くなったというニュースを流している。因果関係はなし。
　そんなとき、「ヘルプ天使」のサイトに匿名のメールが届く。
「原発作業員が連続襲撃されている事件の謎を探ってほしい」
　早速、慎吾が調べてみるが、新聞やニュースではそんな報道はやっていない。そこでピン子がサナに指示して、妙にカッコつける例のメガネ刑事の人から情報を入手しようとする。
「俺に調べろって言われても、そもそもお前がやったんじゃないのか？」と妙にカッコつけるメガネ刑事。噂ではフードマンが、作業員たちを背後からスタンガンで襲い軽傷を負わせているらしい。
「私に人を襲う理由などない」とサナ。
「どうだかな。一応俺も調べてみるが、お前が真犯人だったら、今度こそ俺が捕まえてやる」と、女子がキュンとなる萌えゼリフのメガネ刑事。
　そこで調べていくとどうやら、襲撃されたのはドヤ街からヤクザの斡旋で流れてきた日雇いの元ホームレスばかりだということがわかる。タコ部屋に何人も押し込められ、劣悪な環境でピンはねされながら働いている者たちだ。中には、名前を偽って線量をごまかしている労働者もいる。
　しかし、そういった状況を公表されたくない電力会社や国が、マスコミや警察に圧力をかけ、この事件は内々で捜査されている。メガネ刑事も、顔の怖い帝都物語の刑事の人に捜査を止められてしまう。

「なぜ止めるんですか！」
「なぜもヘチマもあるか！ とにかくこの事件には首を突っ込むな！」
　そんな折、「ヘルプ天使」のサイトに新たな犯行予告メールが届く。
「犯人からのメールだ。明日の午後10時、また作業員を襲うらしい」と慎吾。
「でもなんで？」とミツ子。
「なんでもヘチマもあるかい。……サナ！」ギラリと光るピン子の眼。そして決めゼリフ。
「ヘッチュウ」「え？」ずっこけるサナ。
「やだね、クシャミだよ。誰が噂してんだろ。……サナ。天誅！」
「承知」
　そしてサンドイッチ。「ごめんね、今日米切らしちゃって」とピン子。
　予告時間に犯行現場で待ち伏せると、確かに黒ずくめの女らしき人影が作業員を襲おうとしている。取り押さえるサナ。あっさり捕まる女。
「お前は何者だ？」とサナ。しかし、女はサナよりも周囲を気にしている。
「……マスコミは来てないの？」と女。
　しかし、女とサナを取り囲むのは、待ち伏せていた警官隊だけだ。帝都物語の怖い顔の刑事がメガホンで呼びかける。
「マスコミに犯行予告を流したのはそこのお前か。マスコミには緘口令を敷いている。こんなところには誰も来ない。おい、義賊野郎。さっさとそいつを警察に引き渡せ」
「どうも気に入らないね。……サナ」と後ろからピン子。そして決めゼリフ。
「ヘッチュウ」「え？」ずっこける一同。
「やだね、またクシャミだよ。……サナ。撤収！」
「承知」
　取り囲む警官隊を煙玉で文字通り煙に巻き、闇に消えるピン子ご一行様。
「21世紀に煙玉で逃走って、忍者かっつーの！」と帝都物語の刑事。
「案外、本物の忍者かもしれませんよ」とメガネ刑事。
「バカな。とにかく探せ！」
　再び、場面はスナック「天守閣」。
「あんた、なんでこんな事件を？」とミツ子。
「あたしの父は、2週間前に、作業中に心不全で死んだんです」
「あ、そんなニュースやってたね、確かに」とミツ子。
「父は生前、ずっと作業員全体の待遇について、憤っていました。自分はまだいい、周りにはもっと低賃金で過酷に働かされてる人たちがいっぱいいる。誰かがやらなきゃいけないのに、誰も見向きもしない。それが許せないって」
「でも、それで作業員を襲って何になるのさ。逆ジャン？ 良い夢みれないぜ？ カワイ子ちゃん」
「マスコミにかけ合っても、父の死だってほとんど取り扱ってくれませんでした。それならいっそ、作業員の周りで事件を起こしたほうが、マスコミも取り上げてくれるんじゃないかって。巷で噂になっているフードマンになって、しかも本物のフードマンも呼べば、きっと騒ぎになる

って」と、うなだれる女。
「そうかい。でも暴力じゃ何も解決しないよ」と、ピン子。
「え、自分でそれ言う？ 毎週天誅って決めゼリフで悪を懲らしめてる総元締めが？」とミツ子のツッコミ。
「ごちゃごちゃうるさいオカマだね。いちいちカマうなっての。水戸黄門だって、助さん格さんが悪を懲らしめるのは暴力じゃなくて、世直しなの。とにかくそういうことなら、あんたをここで警察に突き出すわけにはいかなくなったね」と、ピン子。
「え？」
「いっちょう派手に、あたしたちの流儀でやらしてもらおうじゃないの。ババアをナメんじゃないわよ。……サナ！」遂に、ピン子の眼がギランと光る。
「天誅！」
「承知」
　そして握り飯。
　翌日から、白昼堂々、作業員がフードマンに襲われる事件が続発。しかし、襲われるといっても、額に×の傷が付けられ防護服が破られたのかと思いきや、ただ赤い筆で額に〇印を書かれただけ。しかも足元にはなぜか必ずスタミナドリンクがそっと置かれている。
「いったい何考えてんだ、フードマンめ！」と帝都物語の刑事。
　時同じくして、作業員の家や昼食をとる会議室に、合計3000人分くらいのラーメンや寿司の出前がジャンジャン届く。
「これいったい誰の支払いですか？」
「え？ 総理から直々の電話がかかったって聞いてますけど」
「総理？」
　受話器の声「あ、総理だが。オッホン。作業員に釜飯500人分、あるだけドンドン持って行っちゃってくれたまえ！」
「はい、毎度あり！ さすが総理、太っ腹ですね！」と釜飯屋。
「これがホントのカマ飯よ、なあんちゃって！」
　テレビでは、国会前の囲み取材でインタビューを受ける総理。
「あ、良い夢テレビの者ですが。総理がポケットマネーで作業員に寿司やラーメンをおごってると大変評判になってますが、一言」
「いやなに。総理として当然のことをしたまでだよ。……え？」
　その晩、古武術で警備の者を気絶させ、ピッキングで総理の寝室に潜入し、総理の枕元でお香をたくピン子ご一行様。
「起きなよこのスカポンタン！」と、ピン子。
「え、誰？ ん、なんか変な匂いが」と、寝ぼけまなこの総理。
「誰ってあんたはホント子どもの頃からバカな子だよ。ばあちゃんの声を忘れたのかい」
「え、ばあちゃん？ おばあちゃんなの？ でもこの前お葬式を」と総理。
「死んだから霊になって出てきたんだろうが。最近の作業員の騒ぎとか、出前とか、全部ばあち

ゃんの仕業だよ。知ってたかい？」
「知らないよ。おばあちゃん。あの件、メチャメチャお金損したよ。いったいどうしてあんなことしたの？」
「損だって？ あんたは本当のバカだよ。お国のために日々戦っている労働者をないがしろにする総理なんて、あたしの孫じゃないよ。それを知らしめるためにやって来たのさ」
「そうだったんだ、ごめんね、おばあちゃん」
「それより、冥土の土産にあんたにひとつやってほしいことがあるんだよ。作業員の月収を最低でも月100万円以上にしておくれ」
「え、無理だよそんなの。財源がないよ」
「バカモノ！ それが今でも苦しい作業に従事している人に向けて言う言葉か！ ない財源を作ってこその総理だろう！ いいかい、国民の鼻っ面にニンジンぶら下げて、俺に着いて来たらウマイ汁吸えるぞって金で釣るだけが総理の仕事じゃないよ。
　本当の指導者ってのはね、まずたくさんの人々が納得できる公平な夢を語るの。そして夢の実現のため皆様に頭を下げてお願いする。これが本当の政治ってモンだよ。ババアをナメんじゃないよ」
「わかったよ。おばあちゃん。僕、頑張るよ」
　早速、翌日の緊急記者会見では、総理が作業員の月収を100万円以上にする待遇改善策を発表している。
「これで少しはあんたのお父さんも報われたかね」とピン子。
「ありがとうございます。なんと御礼を言っていいか。これから、警察に自首して来ます」と女。
「え、いいんじゃない？ 誰も訴えてないから逮捕されないかもよ」とミツ子。
「私の気持ちの問題です。一から出直したいんです」と女。
「そう。頑張りな。みんな応援してるから」とピン子。
「握り飯、差し入れに行く」とサナ。
「ありがとう！」と去っていく女。
「へ、へ、ヘッチュウ。しかしなんでこうクシャミが多いのかね、今回は」と、ピン子。
「もしかして、先生のお香のせいじゃない？」とミツ子。
「そうか。蚊取り線香ならぬ、ババア線香ってワケだね」と慎吾。
「何言ってんだい、年寄り大事にしないと地獄に堕ちるよ。……サナ！」と、ピン子の眼がギラリと……
　全員「ヘッチュウ！」
　そしてDragon Ash。ナレーションとエンドロール。

『原発戦隊ハイロマン』※第十一回　『帝都物語』とオリンピック憲章より抜粋

　さて、続いては、爆発した原発の近隣地域を盛り上げるご当地ヒーローとして、『原発戦隊ハイロマン』ってどう？ バイオマンみたいじゃない？
　メルトダ・ウン星からの侵略者「プルトニ・ウム大帝」が、「セシ・ウム工作員」や「ストロンチ・ウム怪人」を使って、全世界をヒバクさせてしまった！ 地球の裏側のブラジルとかでは実はそんなに困ってないけど、悪の秘密基地がご近所にある江古路地（えころじ）商店街では、避難すべきかどうかで住民が分断されている！
　そこで、サイ・セーカノー星から降り注ぐ光を浴びた商店街の子どもたち5人が、自然エネルギーと「防護スーツ」「全面マスク」を身に付けて悪と対決する。
　おてんばな女の子「フタバ」は地熱の赤、気は優しくて力持ちな男の子「オオクマ」は太陽の黄、普段はおっとりだけど怒るとコワい女の子「ナミエ」は水流の青、いつもさわやかな男の子「トミオカ」は風力の白、そして身軽で野生児な男の子「ナラハ」はバイオマスの緑。
　それぞれ5色のスーツは重いし暑いし線量の制限もあるから、悪との戦いは制限時間との戦いでもあるけれど、地域住民が仲良く暮らせる未来を夢見て、5人は悪と立ち向かう。
　決めゼリフは「ハイロ・完了！」
　人が住めなくなった無人の町をロケ地にしたり、フラガールと一緒に除染作業したり、ケーブル繋いだり水漏れ防いだり瓦礫撤去したりタンク溶接したり、今日のワンボイスってコーナーで各地に避難した住民の声を紹介したり、題材に事欠かないと思うんだよね。
　Eテレでストレッチマンみたいにやってくれないかな。

# 『こんな泡沫候補はイヤだ！』※第十一回　『帝都物語』とオリンピック憲章より抜粋

　それでは三つ目。さて、新都知事も既に結構なスキャンダルを抱えていそうだから、またすぐ辞任選挙があるとしたらどんな公約の泡沫候補が面白いか、無駄に妄想してみた。
　ズバリ、「東京都民を原発に作業員として送り込む」ワンイシュー候補はどうだろう。
　東京電力の大株主は東京都だし、元都知事も「東京が使う原発は東京に建てろ」って言ってたくらいだから、まずは都知事自ら週二〜三くらいで作業員として従事する。元都知事も都庁に来てたのは週三くらいだったって話だしね。更に都庁の職員もジャンジャンバリバリ送り込むし、都内のハローワークでも積極的に斡旋する。もちろんタダじゃない。
　最も重要なのは、月収を最低100万円以上にすること。その金は以前、都が買い取ろうとした島みたいに、都民の血税と寄付金から捻出する計画で、最終的に国が払うって展開にもってく。
　最後、投票日にはニセ投票箱を全国各地に設置して、都民以外にも勝手な投票を募って、公職選挙法違反で捕まるってオチをつけてほしい。
「国が国策で補助金を払っていたのだから、福島原発が東京の電気を作るのは仕方ないことです。
　しかし、絶対に爆発しないという安全神話を騙って隠蔽を繰り返し人災を引き起こした原発からの避難や、除染、廃炉作業までも近隣住民の自己責任に押し付ける現状に、賢明な都民が心を痛めないはずはありません。これからの原発再稼動は、爆発したら誰が廃炉作業するかまで明確に契約する時代になるでしょう。
　今あの場所で、誰が、何の後片づけをしているのか、全都民が五輪と同じかそれ以上に心を砕いています。そんな都民の皆さんを思いやれる都政にしたい」って演説とか妄想する。
　選挙ポスターの決めゼリフは「受かるためじゃない。ウケるために出た」
　まぁ意味はないけどね。でも泡沫候補だったら一か八かでこんくらいは無茶な言動してほしい。

んで最後は、最優秀五輪賞を作る案。

3色のメダル以外に、五輪と同じ5色のメダルで最優秀五輪賞を設定する。選考はロボコンの最優秀賞と同じ方式、つまり順位に関係なく、最もスポーツマンシップにのっとり、国境を越えてたくさんの人々から応援を受け、世界の平和に貢献した選手に与えられる。

そこで今回パッと思いつくのが、ジャマイカのボブスレー選手だろう。雪のない国からやって来てトラブルに見舞われても明るく、世界中から応援の寄付をもらい、でももらいすぎないようちゃんと中断し、かつ最下位でも「いろいろなことがあったが人生で楽しくないことなんてないさ」と陽気に話す。

ただ一位を目指すだけがスポーツじゃない。みんなが平和で健康、元気で前向きになるのもスポーツだ。五輪憲章とかそういう感じのアレだった気がうろ覚えでするんだけど、だったら順位だけを競うのはナンセンスだし、21世紀的じゃないと思うのは俺だけかって話。

# 『天×誅 THE MOVIE ～今宵、お前にXを～』※第十三回　『天×誅 THE MOVIE ～今宵、お前にXを～』と「よりぬきウマシカさん」より抜粋

　というワケで今回は話題の短編集にはまったく触れることなく、逆に世間でピクリとも話題にならず、かつ俺のなかでも既にだいぶ情熱が冷めてきてるにも関わらず、「こんな『天×誅 THE MOVIE ～今宵、お前にXを～』はイヤだ！」を仕方なくやりたい。思いついちゃったからには書かないと座りが悪いので。誰に望まれたワケでもなく。

『天×誅 THE MOVIE ～今宵、お前にXを～』
前回の予告編：
『天罰～闇の仕分け人～』というドラマが第８話で打ち切りになった。表向きは視聴率の低迷だったが、全体的に視聴率の取れない今クールのドラマの中で、なぜ『天罰』だけが打ち切りになったのか？
『天罰』の主演女優から調査を依頼された『天誅』の面々が探り当てた驚愕の真実とは？ 政府、電力会社、高級官僚、飼い慣らされたマスコミを『天罰』するはずだった幻の最終話シナリオが存在した？ 権力に媚びる上層部の圧力に屈したのか？ 真に天誅されるべき黒幕Xの正体とは？
　女忍者、古武術、ピッキング、声色、そしてピン子。「天誅組」の明日はどっちだ！

本編あらすじ：
　ピン子、いつもの居間で、いつもの3匹のおばちゃんで、せんべいを齧りながらテレビドラマを観ている。
ピン子「いいねこのドラマ、サイコーにいい。何でこの『天罰』ってドラマ、８回で終わっちゃうんだろ。特にこの、主演の娘を助けるおばちゃん、サイコー。いや、おばあちゃんじゃなくて、あくまで、おばちゃんね。なんでかしら、すごく共感できる。ピンポイントでシンクロしちゃう。水泳しちゃう。この際ハイレグはいちゃう。いけるかしらアタシ」
鷲尾さん「いけるわよー。三途の川のマーメイドとはまさにあんたのことよ」
もう一人のおばちゃん「絶対モデル料取れるわよ。♪嫁にきびしい～、マーメード、って」
ピン子「♪金に汚い～、マーメイド～、ってか。余計なお世話だっての」
　そのどうでもいい会話を横でちょこんと正座して黒猫のごとく聞いているサナ。
テレビ「それではここで天気予報です。今週末は、局地的に大荒れとなる模様です」
（中略）
　そこからピン子と愉快な仲間たちがウカウカといろいろしてるうちに、慎吾ちゃんに『天罰』の主演女優から「ヘルプ天使」にメールが届く。
メール「『天罰』打ち切りの裏に、闇の力が働いたのではないかと私は思うのです」
ミツ子「このメール。闇の仕分け人が闇に葬られるって、まさに闇から闇へって感じね」
慎吾ちゃん「ミツ子の交際関係もおんなじくらい真っ暗じゃない？」
ミツ子「失礼ね。アタシの男関係は常にバラ色よ！」

慎吾ちゃん「バラはバラでもバラバラの離散状態だったりして」
ピン子「ハチ、ミツ子。くだらない。本当に毎回くだらないよ、あんたたちの会話。でも、くだらないもの、いいじゃない。アタシは大好き。くだらないドラマにも、いいモノはある。そのメールの件、調べてみよう。サナ。頼んだよ」
サナ「承知」
（中略）
　主演女優にサナが会いに行き、事情を聞く。
地味な主演女優「本当は、おじいさんのストーカーを追いかける回とかあったのですが、気づいたら途中打ち切りになってしまって」
サナ「なぜ？」
地味な主演女優「噂では、最終回に別のシナリオがあって、それが上層部の気に入らなかったという話が。でも本当のことはわかりません。プロデューサーを探れば何か出てくるかも」
サナ「わかった」
（中略）
　プロデューサーの部屋を探ろうと、テレビ局へ正面突破しようとする５人。テレビといえば奇抜な衣装ということで、無茶なコスプレをする５人。例：ピン子＝かぐや姫。ミツ子＝スパイ風全身黒タイツ。慎吾ちゃん＝救急隊員。京本＝カブキ者。サナ＝忍者。もちろん、警備員に止められる。
警備員「すみません、パスがないと入れない規則なので」
ピン子「え？ あんた、あたしを誰だと思ってんの？」
警備員「その、誰って言われても」
ピン子「あたしは天下の大女優だよ！ 普通、顔パスでしょうが！」
警備員「いや、そう言われましても」
ピン子「え？ この業界を何十年も突っ走ってきた面子が5人も揃ってんのに、ねぇ、あたしら顔が履歴書みたいなモンでしょ？ だからホラ、あんたたちも履歴書、見せてやんなさいよ」
ミツ子「ブタゴリラー、キテレツー、コロスケー、今行くからねー！」
慎吾ちゃん「ウーウー、道を空けてくだサーイ、緊急車両、通過しマース！」
　京本、カッコいい決めポーズで威嚇。
　サナ、京本を真似してクナイを逆手に構える感じながら、微妙にオドオド。
　警備員が勢いに気おされて、５人がわちゃわちゃとテレビ局に入っていく。
　サナだけ振り向いて警備員に一礼し、堂々とした４人の後について行く。
慎吾ちゃん「いや、さすが持ってるね、まぁちゃんは」
ピン子「なぁに、この業界、ハッタリでなんぼのとこあるからね。あの守衛さん、きっとあたしのこと往年の大女優と思っただろうね」
ミツ子「そうね。絶対思ったはずよ」
ピン子「だよね。絶対吉永小百合と勘違いした・・・・・・」
慎吾ちゃん「それはない」（食い気味で）

ミツ子「ないわ」
京本「ない」
ピン子「え、そんなことないよ。そうだよね、サナ」
サナ「よくわからない。でも、それだけは断じてない」
ピン子「ああそうですか。どうせアタシは大根メシ一本でのし上がった、キッタネエババアだよ」
慎吾ちゃん「そこまでは言ってないって」フォローする面々。
（中略）
　その後、他バラエティー番組等へのスタジオ乱入。番宣兼ねてのコラボ出演あり。
司会「あれ、ピン子さん、なんでいきなり？」
ピン子「違うよ。あたし、吉永小百合だよ」
司会「それはない」
　この手のやり取りを何番組か繰り返す。
ピン子「あれ、サナはどこ行った？」
（中略）
　藪の中に迷い込んだサナ。声が聞こえる方へ歩く。
侍「この小娘、何ゆえワシの命を狙った。生かしてはおけん！」
　侍が、ぼろを着た娘を切ろうとする。娘の顔がゆう（＝ゆかり）に見える。
　サナがさっと両者の間に入り、侍の刀をクナイで受ける。
侍「え？ ･･･お、おのれ、忍め、成敗してくれる！」
　刀を振り上げた侍を蹴り倒し、娘を連れて逃げようとするサナ。侍がぶつかった弾みでセットがバタバタと倒れる。
監督「カット！」
娘「ちょっと何、どうしたの？ あんた誰？」
　サナ、娘をまじかに見ると、全くの別人であることに気づく。
サナ「す、すまぬ」
　無駄にバクテンとかしながらスタジオから抜け出すサナ。
監督「え、あんなコの出番あった？ ていうか、あのコ主演に使おうよ？ あれ？」
（中略）
　テレビ局、警察とイケメンと怖い顔、政府等、いろいろ調べていくうちに、幻のシナリオがあったことは判明する。しかし、打ち切りが決定するより先にそのシナリオはお蔵入りしていた。打ち切りは単に予算の都合上であり、シナリオの不採用は視聴率や世間の評判、ネットの炎上を気にする現場の空気が自主的に判断しただけだった。
　スナック「天守閣」に集う５人。
ミツ子「つまり、事件じゃなかったってこと？」
慎吾ちゃん「なんだよ。こんだけ調べて、結局くたびれもうけかよ」
ピン子「でも、もし、ちゃんと、世間の批判を怖れることなく、あのシナリオが予定通りにドラ

マ化されていたら、打ち切りはなかったかもしれない」
　ピン子に視線が集まる。
ピン子「何か違うんだよ。この事件は、事件じゃない。もっと大きな事件が、既に起こっている。アタシたち、みんなの後ろで」
ミツ子「どういうこと？」
ピン子「事件にならなかった事件が、この世には本当にたくさんある。自主的にその場を取り繕うことで、取り扱われず、忘れ去られ、思い出されなくなった事件が山ほどある。ゆかりもそうだよ。何度も諦めろって言われたけど、アタシは諦めなかった。どんなに波風を立てても、他人から批判されても、まだ探し続けてる。事件が忘れ去られてしまったら、ゆかりも初めからいなかったことにされちまうから。それだけは、絶対に許せない」
慎吾ちゃん「まぁちゃん」
ピン子「事件はもう、とっくの昔から起こってたのかもしれない。サナ、あんたが来たときから、アタシは、気づいてたのかもしれない」
京本「それは、いったい何を？」
ピン子「先生。この国には、まだまだ語られていないことがたくさんあると思わないかい？ いいとか、悪いとかじゃない。反対や賛成じゃない。ただ、どうしてこれがそこにあるのか。どんな理由で、なぜそこにいるのか。そして、これから先、いったいどうしていきたいのか。議論の始まりは、まず、知ることだよ。何も知らなければ、話し合いにもならない。ただ偏見と無関心が右と左にこの国の空気をかき回すだけ。
　あやふやに出来上がった空気の上にアタシたちの島国が漂ってるだけじゃ、なんだか虚しいじゃない。アタシは、サナが、その空気を･･･････」
　そのとき、「天守閣」の窓が破られる。
ピン子「何者だい！」
　突風が吹き荒れ、店内のボトルやグラスに限らず、すべてをめちゃくちゃにする。
京本「なんだこれは！」
ピン子「空気だよ。これが空気の正体だ。窓の外を見てご覧！」
　窓の外を見ると、大きな黒い雲のような塊が上空に浮かんでいる。
ピン子「私利私欲の塊。無関心の塊。バッシングの塊。事なかれ主義の塊。国民の総意の塊。あれがこの国の正義なら、ぶっ壊して一からやり直したほうがいいんじゃないのかい。サナ」ピン子の眼がギランと光る。
「天誅！」
「承知」
　そして握り飯。
　サナ、握り飯を頬張りながら、ビルの壁を蹴って上空へと駆け上がって行く。
ピン子「もし、サナがこの時代に来た意味があるとするなら、あの大きな私利私欲の塊が、サナを呼び寄せたんだよ。この国の人間一人ひとりが抱えてる闇を、サナは、天誅しに来たんだ！」
　東京タワーのてっぺんから黒い塊に向かって飛ぶサナ。眼前に蠢く闇からたくさんの恨みがま

しい声が聞こえる。
サナ「天誅」
　目をつむり、その闇に大きな赤いバツを刻むサナ。全国民の前にサナが現れ、額にXの字を刻み、そして消える。
　と同時に、裂け目から強烈な光と風が出現しサナを吹き飛ばそうとする。そのまばゆい光の中からユウが必死に手を伸ばしている姿が見えた気がして、サナも手を伸ばす。
　指が届いたように見えた次の瞬間、バツが全ての闇を呑み込み、何事もなかったように辺りが静まり返る。
ミツ子「･･･なんだったの、あれは」
慎吾ちゃん「おい、サナ、消えちまったよ」
ピン子「サナ！」
　ピン子の声が、辺りに響き渡る。
テレビ中継「大変です。先ほど、目の前に女性の幻影が見え、何かの武器で2度、攻撃されました。私だけではありません！･･････」
（中略）
　数日後、サナを除く４人が、スナック「天守閣」で、天誅組の解散パーティをしている。
ピン子「楽しかったね、ホントに。ありがとね。みんな」
慎吾ちゃん「こちらこそ。ホント、いい夢見せてもらったよ」
ミツ子「でもアバヨはいわないで。このお店の面倒は一生見てもらうつもりだから」
ピン子「当たり前だよ。みんなそのつもりだよ。･･･サナはいなくなっちまったけど、アタシたちはずっと仲間だよ。あのコもきっと、元のあっちでうまくやってるよ」
　しんとする４人。そのとき、京本が胸から写真を取り出す。
京本「ゴホン。ちょっといいですか。実はね、みなさんが揃ったときに、お見せしたい写真がありまして」
ピン子「なんの写真だい、先生」
ミツ子「あら、先生のブロマイド？ 買うわ、おいくら？」
京本「いやいや。私、実はかなり前から、お墓に興味を持っておりまして」
慎吾ちゃん「墓に興味って、そんな、墓石のセールスでもするつもりかよ？」
京本「まぁ、あるきっかけで割と頻繁にお墓参りをするうちにね、墓そのものに興味を持ち始めて、江戸時代とか、戦国時代とかの古いお墓を巡るのが趣味になりまして」
ピン子「なに、もったいぶらないで早く要点を言ってよ」
京本「それで先日、用があって三重県西部の伊賀市を訪れまして、ついでにいろいろと墓を巡ってみたのです」
ピン子「･･･三重県、伊賀市？」
京本「その昔、伊州、と呼ばれていた所です」
ピン子「伊州、･･･ってまさか、サナの！」
ミツ子「え、なに、まさかってなんのまさか？」

慎吾ちゃん「まさかのまさかりかついじゃう？ それともくさかりたみっちゃう？」
ピン子「うるさいよ、バカ二人！」
ミツ子「なによ、あたしは別に何も」
ピン子「先生、それで？」
京本「ええ。そのまさかです。随分探しましたが、あったんです」
慎吾ちゃん「え、置いてかないで、先生はいったいどこで何をかついだのよ？」
京本「サナちゃんの、お墓が。その昔、伊州と呼ばれていた、忍者の里に」
３人「えー！」
京本「それがこの、写真です」
　のぞき込む３人。
ピン子「本当に、これ本当にサナの墓なのかい、先生。どうしてわかる？」
京本「たぶん、間違いないでしょう。まぁ、古い墓には本来いろいろ特徴があるのですが、そこらへンのウンチクは省くとして。読みづらいですが、まず名前を見てください」
ミツ子「なになに。･･･セン、って書いてあるように見えるけど」
ピン子「･･･サナの本名だ」
ミツ子「え、ホント！」
京本「そしてこの横の所。読みづらいですが」
慎吾ちゃん「あ、なんか書いてある。えと、握り、飯･････」
サナの声「握り飯、ありがとう。美味しかった。サナ」
ピン子「･･･サナって、書いてある」
京本「この墓はとても立派でした、きちんと残っていて。詳しい人を探して聞いたのですが、なんでもその土地に伝わる話ではその昔、稲作で財を築いた有力者であったらしい、と」
ピン子「あの、サナがかい？」
京本「でも、それだけじゃないんです。もう一つ、その隣に寄り添うように、これも立派なお墓がありました」
ピン子「え？」
京本「これです」
　京本、もう一枚の写真を出す。
ピン子「ユウ。･････おかあさん」
ユウ＝ゆかりの声「おかあさん。サナを助けてくれて、ありがとう。ゆかり」
ピン子「ゆ、かり･････」
　写真を抱えて泣き崩れるピン子。
慎吾ちゃん「つまり、まぁちゃんの娘さんと、サナは」
ミツ子「生き延びて、頑張って、あの時代で、二人で」
ピン子「･･･さびしく、なかったんだね。ゆかりは、サナと二人で、立派に生きたんだね。よかった、よかったよ」
　泣きながら、うなづくピン子。抱きとめるミツ子と慎吾ちゃん。

京本「‥‥‥大丈夫でしたか？」
ピン子「ありがとう先生。うん。あたしね、夢が出来たよ」
京本「それはどんな」
ピン子「昔へ行って、サナとゆかりに会うよ」
慎吾ちゃん「え、どうやって？」
ピン子「そこらへんでどこでもドア見つけてさ、鍵開けてきてよ」
慎吾ちゃん「無理だよ、何言ってんだよ」
ピン子「あんたに開けらんないドアはないんだろ？」
慎吾ちゃん「そうじゃなくて、どこでもドアなんてないよ、どこにもないドアだよ」
ピン子「じゃ、あれだ、ミツ子、キテくんに頼んで、あの発明品、あれ借りてきてよ」
ミツ子「キテレツー、航時機貸してー、すぐ返すからー。って無理よ！」
ピン子「なんだよあんたら、役立たずだね」
　そのとき突風が吹く。
ピン子「え、ここ、どこだい？」
　いきなりどこでもない野原の真ん中に、４人は立っている。

　サナ、気づいて振り返る。
ユウ「ん、どうしたの、お姉ちゃん」
　田んぼを耕しながら、ユウが尋ねる。サナが首をかしげ、少し考える。
サナ「‥‥なぁんて。まさか、ね？」
　ユウを見て、満面の笑顔の、サナ。

Fin.

　とりあえずこんな感じ。
　ちなみにこの『天×誅』、ゲーム化するなら絶対プレステね。ボタン配置の問題で。
　つまり、△ボタンは握り飯を食うだけの「握り飯ボタン」、×ボタンはもちろん、最期の敵に天誅するだけの「天誅ボタン」にして、どっちも1エピソード中一回しか押さない贅沢仕様にしたい。

　それでは最期に、『雑味しんぼ～俺ならこう書く編～』いってみよう。

　不安を抱え、ストレスで病気になり、辛い思いをしている避難民に会う山岡たち。
栗田さん「ねえ、山岡さん。あの人たちをなんとか励ましてあげられないかしら。何か、得意の料理で」
山岡「よし、まかせておけ！」
　どこかへ出かける山岡。数時間後。
山岡「できたぞ、究極の料理！」
栗田さん「え、なにそれ？ スルメイカと、人参？」
山岡「そう。これこそ地域に伝わるソウルフード、イカ人参だ！ さぁ、食べて！」
人々「イカ人参なんて、今更食っても‥‥‥」
　きゅぴーん。
人々「な、なんだこれは、ウマすぎる！」
山岡「このスルメイカは、とりあえず富山の名産品っぽいんだ。しかも、人参も青森の雪にんじんって名産を使ってるらしい！ 調味料の酒や醤油だって‥‥‥（いろいろそれっぽいウンチク）」
人々「確かにウマイが、全部、県外産の材料じゃないか、風評被害にビビッたのか！ 食べて応援しなきゃダメだろ！」
雄山「食べて応援するのは、あなたたち県内の大人や子どもたちじゃない。より被曝していない県外の人たちが食べて応援するべきだ。そして日々、他の地域より被曝している大人や子どもたちはむしろ、より被曝をしていない地域の食べ物を口にするほうが、理に適っている」
人々「確かに各地の名産で作ったイカ人参はウマイ。でも、県内産のイカ人参が、あのどこにでもある味が懐かしい。いつか震災前のように、誰もが県内産の材料を気兼ねなく、本当になんの迷いも確認もなく食べていたあの頃に早く戻ってほしい」
栗田さん「線量をいちいち測ってから食べなければいけない今の状況は普通なのかしら？ それが本当の安心だってありがたがらなきゃいけないのかしら？ こんな状況にしたのは一体誰で、どう責任をとったのかしら？」
　翌日。山岡、栗田さんと二人で話している。
山岡「彼らのなかにもし、病気で死ぬ人が出ても、原因不明や、避難によるストレスが原因って死因になるかもしれない。被曝の因果関係なんてそう簡単に立証できるものじゃない。でも、原発が爆発しなければそんなストレスを感じることはなかったし、放射能のせいでもたらされた震災関連死なのは間違いない。しかし、そうやって死んでいく人は特にニュースにはならない。この国は昔から、そういう尊い自己犠牲の、我慢強い人々によって支えられた国なのかもしれない」
同僚の女性の人「山岡君。そういうことは、サービス残業をしてから言ってよね！」

声の高い上司の人「そうだぞ、山岡！ おまえが偉そうに言えた義理か！ おまえ、全然サービス残業しないから、俺ばっかり仕事が回ってきて大変だ！ 社主、私の残業代、もっと増やしてください！」
社主「断る！」
声の高い上司の人「ひー、断られたー！ ブラック新聞社だー！ 訴えてやるー！」
ほのぼのとした笑い。

Fin.

『こんな記者会見はイヤだ！』※第十三回　「はみだしウマシカさん」より抜粋

　そういえば、リケジョの件で書きたいことがあったんだった。あの記者会見を見たとき、俺ならこう書くって思ったことがあった。

「こんな記者会見はイヤだ！」

「これより記者会見を始めます。ご質問がある方は挙手を・・・・・・」
「あ、ゲスニックマガジンの西条です。今、日本国中が最も知りたがってることで質問します。ズバリ、あの割烹着、あれ実はおばあちゃんのお古じゃなくて、百貨店で買ったって噂ですが。本当ですか？」
「いいえ。割烹着は・・・（タメ）・・・買ってません。おばあちゃんからもらいました」
「え、本当ですか～？ 実は、話題づくりのために百貨店で買ったんじゃないんですか～？ あ、じゃこの噂はどうですか？ 研究室でスッポンを買うなんて不衛生だって話があるのですが、あのスッポンも、実はつい最近購入したんじゃないんですか？」
「いいえ。ずっと前から飼っています」
「本当かな～？ 飼ってたとしても、誰か他の人に世話してもらってたとか、あ、逆にスッポンの世話が忙しくて、研究はそっちのけだったりとか？」
「いえ。スッポンの世話も研究も頑張りました」
「それでは次の・・・・・・」
「あ、ゲスマガの西条です！ んじゃあの噂は？ あのピンクの壁紙も、つい最近替えたって、どうですか。これは本当でしょう？」
「いえ、あの壁紙もずっと前からです」
「本当かな～？ 壁紙なんて、何色でもいいんじゃないのかな～？」
「それでは次の方。あ、そちらの記者の方」
「はい。毎朝新聞ですが。すみません。今日本国民が最も知りたいことといえば、やはりあの細胞は本当にあるのか、という重要な科学的命題だと思・・・・・・」
「ゲスマガの西条です！ おい毎朝、邪魔すんな、全然違うっての！ 今日本国民が一番知りたいのは、彼女があの割烹着でハダカ割烹着したのかって重要な命題だよ！ いわばチセイ的な？ 痴女の痴に、性欲の性で、痴性的に重要な命題？ ねえ、どこでね、いつどこでだれとなんの料理でハダカ割烹着したの？ それだけ教えて！ ね？・・・・・・」（つまみ出される）
「あの記者こそ、現代日本でボーイズビーアンビシャスを体現した記者なのかもしれない」
「あ、西条です！（無理やり戻ってくる） じゃスケスケ割烹着の購入予定は？ 略してスケ烹着？」

　こういう会見だったらよかったのになぁ。
　NHKの『LIFE!』にちゃんとリケジョ本人呼んで来て、本家にこれやってほしいなぁ。

俺は特定の番組録画する以外、テレビはほとんど観ないし期待してないから、バラエティ番組がリケジョを差別的に扱おうが興味ないんだけど、単にその企画、本当に面白いの？ 笑えるの？ってはは思う。

知的でなくても差別的であっても、差別されてる側もつい笑っちゃうような毒が一流だと思う。つまり、毒蝮三太夫みたいなね。「おいババア、まだ逝かねえのか。このくたばりぞこないが」って声かけてほしくて高齢者が中継に押しかけるって、とんでもない偉業だよ。そういうところを目指したい。

『ソウジ・キッド』※第十五回　「はみだしウマシカさん その３」より抜粋

俺だったらW杯を題材にこういう（映画の？）あらすじを考えた。いってみよう。

アイススケートは競技が終わった翌日、エキジビジョンがある。だったらW杯も終了後に、優秀選手22名+控え数名によるエキジビジョン・マッチがあってもおかしくないじゃんって発想から始まる。
監督は決勝戦の2チームから。優秀選手はその年のベスト16までのチーム内から各1～2名ずつ選ばれる。同じ国の選手は別のチームになる。

今回の目玉は何といってもジャマイカの英雄（以下、英雄）と呼ばれるFWの選手。FIFAランクでも決して上位ではなかったジャマイカを二大会連続ベスト8まで押し上げた功労者だ。しかし英雄は年齢的にも最後のW杯であり、今後は若い選手が台頭してくるだろうという焦りもある。
その年、ジャマイカからは二人の選手が選ばれることになっていた。しかし、英雄はここで一計を案じる。「一国に二人の英雄はいらない。英雄は私一人でいい」。
エキジビジョン・マッチ参加選手の発表がある閉会式直前、英雄以外のジャマイカ選手が全員謎の腹痛に襲われてしまう。そこでジャマイカチームは急きょ代役として、雑用のスタッフ（以下、雑用）を選手としてエントリーしてしまう。
この雑用、実はそもそもボブスレーの選手だったんだけど、もちろんボブスレーもしたことがない。ただボブスレーを上手に磨き上げる腕は超一流でサッカーも大好きだったため、ボール磨きとしてチームに帯同していた。
さて、エキジビジョン・マッチは三日後。
参加選手の発表翌日、優秀選手が2チームに分かれ自己紹介するミーティングで、雑用が無邪気に出場経緯を話すのを聞いた監督は切れる。ファックとか言ってしまう。
おかげでチームワークはバラバラ、他にも若手で生意気な選手やプライドは高いが旬を過ぎた選手などの問題を抱えている。しかも練習中にボールが次々にパンクする等アクシデント続き。
最悪の空気のロッカールーム。
そこで一人、無邪気に窓拭きをする雑用。
「お前、こんなときになんで窓なんか拭いてるんだ？」
切れるキャプテンに無邪気な笑顔を返す雑用。
「だって、磨くボールがもうなくなっちゃったからね」
とんだアメリカン・ジョークに、切れそうになるキャプテン。
そのとき、同じ窓の反対側からも窓拭きしている老人がいることに気付く。
「なんだあいつは。お前の友達か？」
「いや、ただの窓拭きが好きな老人みたいだけど」
「何言ってんだ？ そんなバカみたいな奴いるか？」
白髪でヒゲぼうぼうの老人が、白と黒の五角形チェック柄の雑巾を使い、独特の動きで窓を拭

いている。老人が素早く窓の四隅に雑巾を動かすと、それを追っかけて雑用がすばやく雑巾を動かす。まるで「サンドウィッチマン」の「ガソリンスタンド・コント」のよう。
「お前、その動きは、いったい」とキャプテン。
「こんなのは序の口さ」と雑用。
　その言葉が老人に通じたのかはわからないが、さらに早く動く老人の雑巾を、さらに素早く追いかける雑用。それを見てチームメイトが呟く。
「あの老人は、もしかして、…ミヤギ、さん？」
「え？」
　驚く一同。ベスト・キッドの音楽流れる。
「しかし、こいつは、もしかしてとんでもない逸材なのかも」

～中略～

　エキジビジョン・マッチ開始のホイッスルが鳴る。
　開始早々に英雄とキーパーが交錯しキーパー負傷退場。控えキーパーとして、雑用がゴールマウスを任される。
　驚く英雄。実は彼こそが、ジャマイカ・チームの食事に下剤を盛り、ジャマイカの英雄として君臨し続けようと目論んでいた張本人なのであった。ってバレバレの展開。しかし、雑用がピッチに立つとは考えていなかった。
　鋭い英雄のシュートを、きわどくパンチングで防ぐ雑用。
「いったい、どうなってるんだ！」
　バラバラだったチームが、雑用の文字通り身を呈した頑張りで一つにまとまっていく。

～中略～

　結局2対2くらいでPK戦へ。
　PK戦は4人目まで終わって3対3で先攻側、キッカーを雑用に託す。
「エキジビジョンなんだから、楽しくやらなくちゃな。お前のおかげでいい試合になったし、サッカーを始めた頃を思い出せたよ」とキャプテン。
「いや、やるからには決めるよ」と雑用。
　ニセミヤギさんとの修行を思い出す雑用。
　もちろん自然に、鶴の構え。
　唖然とする会場。
　当たり損ねのキックでコロコロとボールが転がりそのままゴールマウスに吸い込まれる。
　どよめく会場。
　そして、最終5人目、2対3でキッカー英雄対キーパー雑用のPK戦に。

～中略～

　雑用は後に、その磨き技術が認められ、紆余曲折を経てカーリングの選手（リンクをブラシで磨く役）になりました。
　あと、PKはちゃんと止めて、MOMに選ばれました。以下、その時の会話。
「お前が新しい英雄だ」PKを止められ、握手を求める英雄。
「いや、僕は日本人に掃除の素晴らしさを教えられた、ただのボール磨きさ」

以上

『悪代官におれはなる!!!』※第十六回　『キュウソネコカミ』とみんな大好き陰謀論より抜粋

　というわけで、みんな大好き陰謀論って眉唾話に突入するんだが、俺がもしこの世界を牛耳る支配者だったら、影の存在として君臨することにとっくに飽きてると思う。ハリウッド女優がクラウドでハレンチ画像流出したけど、金持ちになって力を持つほど火遊びがしたくなるんだろうと俺は思う。
　だからもし俺が今後テロを演出する機会があったなら、ビルに飛行機は突っ込ませないで爆弾で爆破するね。それであの爆発はなんだったんだって騒がれてから、飛行機がビルに突っ込んでる雑なCGを捏造してメディアに流させる。その嘘が世界を席巻する様に高笑いするね。いくら一般市民が怪しいと疑っても、メディアの情報のほうが真実として世界に発信され、誰も支配者を覆す力なんて持ってない。圧倒的無力さが一般市民に浸透する。支配者にとって単なるジョークだと思う。
　あるいは俺がこの国の政治家だったら、自分たちだけが儲かる仕組みを作って、公給もらって末代まで安泰な権力を構築するね。そのために一般市民の銭を徴収して自動的に自分の懐に入るようなシステムを構築する。大昔から変わってない年貢システムなんだろう。

『汚染水バケツチャレンジ』※第十六回　『キュウソネコカミ』とみんな大好き陰謀論より抜粋

　というワケで最後に、「汚染水バケツチャレンジ」の企画を考えた。
　福島で国家的プロジェクトに従事している下請け作業員に、一日一万円の日当を渡す基金を設立するために、日々汚染水が漏れ続けている現実から目をそらさないために、あとバケツにウラン入れて被曝した昔の事故も忘れないために、タンクから漏れている汚染水をバケツリレーして貯水プールまで運ぶ企画をやったらいいんじゃない？ 右も左も政治家も貧乏人も争う前に一丸となって、そのくらいの痛みは分け合わないといけないんじゃないの？ って意味でね。

# 『GZばっか』※第十六回　「はみだしウマシカさん　その４」より抜粋

「ＧＺばっか」

どこでも　そこかしこでも
モノクロの言葉が飛び交う
シロとクロに分かれて
陣取りゲームが終わらない

とはいえ　それはバーチャル（ニジゲン）
現実には誰も話さない
ため込んだストレスを
文字に押し込めてぶちまける

表裏一体の世界で
パタパタ意見ひるがえす
知りもしない獲物も
みんなでハタけりゃ怖くない

実は裏で金持ちの
都合通りに踊らされ
グレイに染まる　クレイジー？
おー　おー

めぐる
めくりめぐる世界で
シロとクロのパイを
指先に乗せて

衝動のフリして
実は　周りとシロクロ（色）　合わせて
安心してから
投げつけ合うのさ

とはいえ　俺の日常
生活は何も変わらない
天然色の現実（ヨジゲン）を

ＧＢ（ゲームボーイ）には戻せない

誰に向けて　わかりやすく
何を言ったとこで
くるくるめくる　堂々巡り
いずれバターになって

溶ける
溶けまくる俺たちは
媚べ媚べに媚びて
舐み舐みに舐めて

結局うやむや
ピクリとも動かないまま
1億人の足を
止められないのさ

めぐる
めくりめぐる世界で
シロとクロのパイを
指先に乗せて

衝動のフリして
実は　周りとシロクロ（色）　合わせて
安心してから
投げつけ合うのさ

混ざる
混ざり合うこの世界で
そんなこんなあっても
世の中ＧＺ（グレイゾーン）ばっか！

どうでもいいのさ
現実逃避だけなのさ
ホントに言いたいのは
キミが　好きなのさ

# 『寄生獣　予告編』※第十七回　『寄生獣』と「ネトウハ♡」とは何か？ 前編より抜粋

　例えば俺がもし『寄生獣』実写版の予告編作るとしたら、ただのんびりダサいだけの新一と村野が公園を歩いて座るだけのシーンを撮るよ。それでナレーションを付ける。
「日常はどこにもいかない。どれほどの悲しみや苦痛に満ちていようとも、日常はあなたをその渦から逃しはしない。昨日と同じ顔をして、全く別の眼をした日常が……
　この世界には、恐怖と怒りと、愛がある」
　そこで新一の右手に目が一個付いてる画面で暗転させる。原作を最後まで読んだら、互いに公園で笑い合える日常がどれほど愛おしいかってことがイヤでも身に染みるから。震災後の今、逆に力を得たような作品だと思う。

『イケメンに税を！カツラに補助金を！』※第十八回　『寄生獣』と「ネトウハ♡」とは何か？ 後編より抜粋

---

一般的に、遺伝的な障害を持つ人や社会的弱者、高齢者や生活困窮者などを福祉で救済する社会は「平等」な社会って呼ばれる。今までこの国も含めて多くの社会が（建前だけでも）「平等」を目指してきたと思う。
　それに対して、「均質」な社会は遺伝（世襲）的な要因による差異が放置され助長される社会だろう。障害者と健常者の扱いは同等。金持ちの子はずっと金持ち。世襲バンサイ。貧乏人の子だくさん。

　そう考えると、Uが書きたい要旨はむしろ、遺伝（世襲）的な要因による格差にもっと目を向けたほうが、遺伝（世襲）による不平等を是正する役にも立つってことだと思う。
　イケメンは遺伝でずるいからイケメン税を課したほうがいいとか、相続税をうんと高くして世襲政治家を全員ホームレスからやり直させるとか。逆に障害者を手厚く保障するとか、カツラに（エコカーみたいな）補助金出すとか。それこそが遺伝（世襲）による不平等をなくす政策だと思う。もちろんわざとふざけて書いてるとこもありますが。
　そういう意味で今この国は平等な社会よりも、むしろ均質な社会を目指していると俺は感じるね。
　たとえば生活保護引き下げ。生活保護を引き下げると、同時に最低賃金の設定も引き下がるらしくて、そうなると生活困窮者がどんどん出てくるよね。でも、海外の安い賃金で生産される製品と競争するにはこの国の人件費は高すぎるから、「生活保護は悪」って空気を広めて最低賃金も一緒に下げたほうが、経営者にも産業界にも国にも社会保障費削減にも都合がいい。貧乏人はどんどん増えるけど。

　さらに言えば最近の調査で、米国は上位1％の収入が国民の全収入の約20％を占め、また、上位10％の収入が約50％を占める超格差社会だそうだ。
　また、世界の富裕層人口は3500万人で全体の0.7％だが、世界全体の富に占める割合は44％だそうだ。
　俺がこれで思うのは、株とか為替相場って「金を金で引っ張る取引」だから、大金を持てば持つほど有利な仕組みだし、金持ち同士が共謀すればさらに有利さは拡大するって話だ。
　例えるなら砂場にヒモ付きの磁石を埋めて、引き上げると砂鉄が取れるのに似てると俺は思う。でかい磁石を持ってるヤツがより多くの砂鉄を取れるし、場合によっちゃ他人の磁石ごと総取りできる。もちろん砂鉄の一粒一粒だって実は貧乏人が投資したハシタ金なんだけど、でかい磁石にかかれば元も子もない。競馬みたいに、金持ちも貧乏人も的中率自体は公平なギャンブルとは違い、相場は大金積めば価格を上げ下げ出来る仕組みだから、貧乏人は振り落とされないよう必死でしがみつくしかない。
　でも別に俺は格差社会を善悪で判断するつもりは毛頭ない。善悪なんてそもそも便宜上の曖昧な概念だし、自分が生き残るには自分で考えるしかないからだ。前にも書いたけど、虐げられてるなら戦う言葉を持つしかない。そのうち『鉄は熱いうち、媚びは高いうちに売れ！』とか、『ドレイの品格 一賢いヘツライ術一』とかって本がベストセラーになるんじゃないかな、冗談抜きで。
　泣き言だって、泣き方や拡散の具合を工夫すれば商売になる時代だから、貧乏人もやり方次第では這い上がれる可能性があるかもしれない。遺伝（世襲）的差異を放置する均質な社会では既得権益による岩盤規制も多いだろうけど。

『雑パンⅢ世 ２時間スペシャル』※第十九回　「はみだしウマシカさん　その６」より抜粋

---

♪ちゃら、っちゃ。ちゃら、っちゃ。ちゃら、っちゃ。ザパンザサード！ わお！

　事件は雑パン（以下ザパン）の予告状から始まる。
「本日、深夜0時、殉愛（仮）をいただきに参上する。ザパンⅢ世」

「これですかな、ザパンの予告状は、どれどれ、最近老眼がひどくて、なるほど。ザパンはあの有名なダイヤモンド、殉愛（仮）を狙っておるわけですな。あなたが所有している、100カラット、時価数十億円でしたかな。しかし私、雑ニ形（以下ザニ形）が来たからにはもう安心です。ザパンは必ずや、私が捕まえてみせます！」
「いや、ザニ形さん、残念ですが、もうその必要はありません」
「なんですと、インターポールの警備体制を疑うのでありますか？ 雑ゲイツさん（以下財津さん）。確かにあなたは大金持ちで、ドーベルマン100頭、傭兵50人を常に屋敷に巡回させていることは承知しております。しか～し、ザパンにとってそんな警備はザルも同然です。ヤツは我々常人には思いもつかぬ盗みを働くのでありまして」
「いや、そうじゃないんです。実はもう、盗まれたんです」
「は、何をですかな？ まさか心とか冗談は言わんでくださ……」
「殉愛（仮）、今さっき、盗まれたんです」
「ぬわぁんですと！ 失礼します！ おぅのれザパン、卑怯者め、逮捕だー！」
　壁にぶつかりながらわちゃわちゃと駆け出していくザニ形警部たち。それを見ながら、ニヤリと笑う、財津さん。

　場面転換。
「今回のヤマはぬかりなしだろうな、ザパン」
「まかせときなって雑元。俺様の下調べが雑だったこと、あるか？」
「ザパン、前回もつまらぬ物を斬らせたこと、忘れたとは言わせぬぞ。ザパンが油断しておらねばあんなことには」
「わあってるって雑右衛門（以下ザツえもん）。今回はちゃあんと半年かけて調べ上げたって、あの財津屋敷の警備体制をな」
　ザパンがフィアットのハンドルを握り、助手席に雑元、屋根にザツえもんが胡坐で座っている。
「今回は二人の手をわずわせるようなマネはしな……」
　車の前に突然、男が飛び込んでくる。
「え？ わわ！」
　急ハンドルを切るザパン。車が電柱に激突。

「いててて。おい、ちきしょー、どこ見て……」
　男、道路の真ん中に倒れている。
「おいザパン、お前轢いたんじゃないのか？」
「なーにをバカなことを、俺の運転テクを甘く見るんじゃねーっての」
　男に近寄るザパン一行。
「おい。ちょっと、おにーさんよ」と雑元。
　仰向けにしようと持ち上げた男の懐から、ダイヤモンドが転げ落ちる。
「え、これは」と雑元。
「殉愛（仮）……」
「なんだと？ ザパン」
「拙者の聞き違えでなければ、これから盗むはずのそれが……」
　ザパンの真剣な目線のアップ。
　すると突然、銃を持った黒づくめの男たちが現れる。男とザパンに気づき、問答無用でマシンガンを乱射する。
「おいおい、なんだってーの、いきなりよぉ！」
「逃げるぞザパン！ ザツえもん、頼んだ！」
「早速拙者に頼るとは先が思いやられる……」
　三人、ぶつぶつ言いながら軽い身のこなし。マシンガンの弾を雑鉄剣で跳ね返すなどして、男を抱えながらその場を逃げ出す。

　場面転換。
　アジトのロッジに戻り、男を介抱しながらカップラーメンをすする三人。
「なんだってこんな目に合うのかね、ったく」
「しかしザパン、お目当てのお宝が手に入ったんだ。今回のヤマはこれで一見落着だな」
「そうでござるな。これを食い終えたら、早速今回の報酬を」
「いや、話はそう簡単じゃねえよ、お二人さん」
　テレビでニュース速報が入る。
「臨時ニュースです。ザパンがあの世界的に有名なダイヤモンド、殉愛（仮）を盗みました。今回ザパンは卑怯にも、予告時間より半日以上早く盗みに入ったとのことで、警備に油断があったと思われます！」
「おいおい、濡れ衣で人を卑怯者呼ばわりしやがって」
「ザパン、そりゃお前の気持ちはわかるさ。せっかく半年かけて調べたお宝が、こうもあっさり向こうからやってきた上に、こんな濡れ衣着せられたんじゃ、おさまりがつかねえのも無理はないが」
「しかし、お宝はお宝でござるし、最近いりようでござるからして」
「なんだ、ザツえもんは金欠か？」と雑元。
「恥ずかしながら、家賃滞納がたたって大家に締め出しを……」

「かー、そんなしみったれた話じゃねえよ、これは」とザパン。
「あら、ザパン。今回のお仕事、ずいぶん早く片付けたみたいねぇ」
　玄関のドアから、雑二子（ザジ子）ちゃん登場。
「しみったれとは失敬な、ザパンの盗みが毎回うまくいっておれば拙者も……」
（無視して）「これはこれはザジ子ちゃん、今日はまたどうして？」
「もちろん、あの噂に名高いダイヤを一目見せてもらえれば、と思って。あら、その人だぁれ、どうしたの？」と言って男に気づく。
「いやぁ、そんなことよりもダイヤ見せたらお礼に、ザジ子ちゃんのあぁんなとこやこぉんなとこも見せてもらえちゃったりするのかな～、ぬぁんちって」
「いやぁね、ザパンのえっち。でも本当にそんなことで見せてくれるのかしら？」
「ダメだぞザパン、ザジ子に見せたらすぐ盗られちまうからな」
「そうでござるよ、すまぬがザジ子殿、ここはお引き取り願いたい」
「なによ、ケチ、あんたたちには聞いてないわよ。ねぇザパン、お・ね・が・い♡ ここじゃ邪魔者がいるから、あたしの車でゆっくり、ね♡」
　投げキッスしながら外に出ていくザジ子。
「ん～、俺はダメな男だ～。いまいくよ、ザジ子ちゃ～ん」
　ザパンも外に出ようとする。
「おい、ザパン！」「待つでござる！」
　雑元らのタックルを軽くかわし、ザジ子の車に窓から飛び込むザパン。しかしその数秒後、身ぐるみはがされ車外に放り出される。
「いつもありがと、ザパン、それじゃまたね～」
　胸元にダイヤをしまったザジ子の車がさっと走り去る。
「あんれま、ザジ子ちゃん、ひどいんでないか～い」
「おいザパン、またやられたぞ」「いつもの油断でござるよ！」
　ザパン、振り返って。
「ぬぁんちって、ホラ」
　そう言って、パンツの中から別のダイヤを取り出す、ザパン。
「お前、泥棒より手品師のほうが向いてんじゃねえのか？」と雑元。
「バカ言え、俺はあの大泥棒アルセーヌ・ザパンの孫……」
　男、目を開ける。
「お、気づいたみてえだぞ」と雑元。
「ザ、パン？」男、周りを見渡す。
「やっと気づいたな。おい、傷は痛むか？」と雑元。
「ここは、どこだ？」
「妙な奴らに追われて瀕死のところを、俺たちが助けてやったんだ。なぁ、ザパン」と雑元。
「ザパン、お前が？」
「お、俺の名前もちったぁ有名になったってことかしら」

「ふざけるな！」
「え？」
「道楽で泥棒ごっこしてる奴に何がわかる！」
　急に怒り出した男、ザパンが持っているダイヤに気づく。
「それは、返せ！」
　ダイヤをひったくり、外に出ようとする男。
「おい、無理に動くと傷にさわるぞ」と雑元。
「触るな、お前らなんかに、殉愛（仮）を渡してたまるか！」
「さっきから、ちょっと落ち着けよ」
「うるさい！ うっ！」
　雑元の銃で当身をされ、気絶する男。ダイヤが地面に転がる。
「なんだこいつ、ザパンの知り合いか？」
「いや、全然知らねーが、それより、これを見てろよ」
　床に落ちたダイヤを思いっきり踏みつけるザパン。
「おい、なにやってんだ！」「ザパン、気でもふれたか？」
「よおく見ろってお二人さん」
　ザパンの足の下で、ダイヤが砕けている。
「ダイヤが、粉々に砕けやがった」
「やっぱりな。よくできてはいるが、こりゃ、ニセモンだぁ」
「なんだって？」
「こいつはなにやら裏がありそうだぜ」
　テレビでは、財津さんがインタビューに答えている。
「幸い保険には入っておりましたが、ダイヤを盗まれたのは本当につらいです」
　ニヤリと笑うザパンの目線のアップ。

　カタカタ、カタカタ、タイプライターの音。一文字ずつ、字幕。
「殉愛（仮）は雑にゃ盗めない」

「おいザパン、カッコつけてもパンツいっちょじゃしまらねえぞ」と雑元。
「ありあり～」ずっこけるザパン。

　場面転換。
　夜、暗闇にライターが点く音、タバコに火がともる。
　カーテンが風で揺れ、月明かりで窓のそばに立っている人影（ザパン）が浮かび上がる。
　豪奢なベッドの上に寝ているのは財津さん。気配で目覚める。
「おっと、動くな。動いたら命はねえぞ」
　起き上がろうとするが、枕元に立っている雑元が額に銃口を向けていることに気づく。

「…おまえは、雑元か。ザパンの子分だな？ 何しに来た。警備は何をしている」
「俺は子分じゃねえ」
「まぁまぁ雑元。財津さん、いい子は早寝するもんだぜ。あんたのいい子ちゃんたちは、今頃はそりゃあいい夢を見てるんじゃねえのかな」
　窓から見える庭で、たくさんの犬や人がグーグー寝ている。
「…さすがだな、ザパンとやら。しかしここにはもう殉愛（仮）はないぞ。ある男に盗まれてな」
「そうかい。その男ってのはやっぱ、ザツヤネン系ザシキ人のザカジン。あんたに相当な恨みを持ってるって噂の」

　場面転換。
　男、目覚める。その隣にザジ子ちゃん。
「あんたは……」
「あら、お目覚めね。あたしはザジ子」
「ザジ子？ ザパンの仲間か？」
「仲間？ そうね、今は。でも敵になるときもあるのよ」
「敵？ いや、どうでもいい。あんたらの世話にはならん」
　立とうとする男。
「起きないで、ザカジン。傷に響くわ」
「どうして俺の名を」
　ザジ子ちゃん、横たわるザカジンの手を握る。
「ザパンに言われて、ちょっと調べたの。殉愛（仮）はザシキ人の長が代々継承してきた由緒ある宝石、ってこともね」
「そんなことを調べてどうする？ 俺たちザシキ人は、財津さんらに国を追われ、大勢殺された。俺の家族、妻や子どもたちも。そして、家宝であり民族の誇りである殉愛（仮）も財津さんらに盗まれた。だがあんたらには関係ない」

　場面転換。
「なぜザカジンにニセの殉愛（仮）を盗ませた？」とザパン。
「ふっふっふ。傭兵たちの情報網で、ザカジンたちが私の殉愛（仮）を盗もうと計画しているのがわかった。ザカジンごときにこの財津屋敷の警備網が破れるワケはないが、念には念を入れておきたい。そこへザパン君、君からの予告状が舞い込んだ。これは面白い見ものだよ。早速、私がザカジンの連絡先を調べて直接電話した。コソコソ嗅ぎまわるのは勝手だが、モタモタしてると大事な誇りをザパンに盗まれるぞ、ってね。ザカジンの狼狽ぶりと言ったら、滑稽というほかなかったわ」

　場面転換。

「どうしてあの日、殉愛（仮）を狙ったの？」とザジ子。
「先にザパンに盗まれて闇の質ルートにでも流されたら、もう取り戻す術はない。何年調べても殉愛（仮）の在り処を突き止めることはできなかったが、とにかく財津屋敷に乗り込んでザカジンと刺し違えてでも奪い返すつもりだった。……だが結局俺は、一緒に忍び込んだ仲間たちを殺され、更に殉愛（仮）のニセモノをつかまされたってことか」

　場面転換。
　眉間に皺を寄せるザパン。
「ザカジンが俺と出会ったのも、あんたの差し金か？」
「いやなに、ちょっとした余興だよ。明日には、ザパン一味が仲間割れで同士討ちって記事が新聞の一面を飾る手筈になっている。今頃君のアジトには傭兵たちが潜入している。彼らはその手の工作のプロだ。君も知っているだろう、このターヒャク・ラクーサ国で今何が起こっているのか。正義の女神は金と権力をアソコにぶち込まれると非常に従順でね、法規制がゆるい私設軍隊は人を殺しても治外法権でおとがめなしだ。邪魔なザカジンたちも殺せて、保険金まで手に入る。それもすべて君のおかげだ、ザパン君」
「ほほう。俺にそこまでしゃべるってことは、ここから生かして帰さねえつもりか？」
　ニヤリと笑った財津さん、右手に持ったリモコンのスイッチを押す。壁一面に機関銃が現れ、銃口がザパンを狙う。しかしその後、何も反応がない。カチ、カチ。何度もスイッチを押す財津さん。
「ちっ、どういうことだ」焦る財津さん。
「あれれ、故障しちまったのかねぇ。でなきゃ誰かが先に去勢しちゃってたりして」
　ザツえもんが雑鉄剣をわずかにカチリと鞘にしまうと、一斉にバラバラと崩れ落ちる機関銃。
「…ほお、なかなか手際が良いな」と財津さん、そう言いながらリモコンの別のボタンを押す。各待機所にいた傭兵たちが異常に気づき寝室へ向かう。
　ザパン、それに気づかず、
「それもこれも、殉愛（仮）を盗むために、半年間みっちりこの屋敷を調べ上げたおかげさ。もちろんそれだけじゃない。肝心のモノホンの殉愛（仮）も、すでに俺様がいただいた」
「ふ、何を言うかと思えば。君は相当マヌケなコソ泥のようだね、ザパン君。本物の殉愛（仮）の在り処はトップシークレットだ。君がいくら探ったところで知る由はない。しかも、摘出することが絶対不可能な場所に保管してある」
　夜風が寝室に流れ込み、ゆっくりとカーテンを揺らす。
「…あんたの体の中、だろう？」とザパン。
　驚く財津さん。
「ほお、意外だ、よく調べたな。医療班の数人以外は口封じしたのに。だが、だったら話は早い、君もわかっているだろう。殉愛（仮）は私の腹を八つ裂きにするか、最先端の医学的施術がなければ絶対に取り出せない仕組みになっているんだよ。
　ザパン君、今回の件で君のことを少し調べてみたが、特に最近の君の盗みには大義も覚悟も

ない。なんとなくそれっぽい宝石を派手なアクションで面白おかしく盗んだ気になっているだけだ。
　所詮搾取される側のお前みたいなコソ泥に、私を血みどろに切り刻む覚悟などない。だろう？」
「さぁてなあ。ご大層な説法だが、そいつぁとんだお門違いだぜ、財津さん。大義やら覚悟なんて俺みてえなコソ泥にゃ荷が重すぎるわ。俺はただ、狙った獲物は命に代えても盗み取る、それだけよ。アルセーヌ・ザパンの名に泥は塗れねえからさ。ってなワケで、これなーんだ。ほれ、雑元」
　ザパン、パンツからダイヤを取り出し、雑元に投げる。
　雑元、ルーペとダイヤを寝ている財津さんの目前にかざし、検分させる。
「…ん？ これは、本物のダイヤ、この大きさ、このカッティング、まさか！」
　雑元、さっと懐にダイヤをしまう。
「そのまさかのまさかり担いだ金タロ飴ちゃん」
「バカな、盗めるはずがない、しかし……」混乱する財津さん。
「この半年間、そりゃ調べ上げるのにはずいぶん苦労したぜ。でもこっちにゃ、斬れぬものはないまさに斬り札、ザツえもんちゃんが控えておりますからして」
　ザツえもんの流し目がギラッと光る。
「ふ、時代遅れのサムライか、たかだか日本刀で何ができる」と財津さん。
「あらら、ザツちゃんのことも調べてたの。でも調べ方が雑じゃないかしらん。斬りつけたカエルを傷つけることなく、下にある岩だけを叩き斬る波紋流奥義を体得した拙者なら、皮膚に傷をつけることなく体内のダイヤを取り出すなど造作もないでござる。だよな、ザツえもん」
　無言で目が光るザツえもん。
「なんだと、そんなバカな」と財津さん。
「それよりも、今、あんたの体内に何が代わりに入ってるか、そっちを心配したら？」
「なに？」
「マスコミが金と権力に弱いのはどの国も一緒でね。この前爆発した発電所からプルトニウムを含むいろんな汚染物が飛び散ったままになってるって話、ほとんど報道もされないし、何が何個どのくらい降ったのかも確認できてない。その数は不明、ってとこさ。そこでこの前ピクニックのついでにゴミ拾いしてきたんだが、簡単に捨てられない違法なゴミだから、リサイクルもかねて、財津さんの体内に入れ替えさせてもらった。大丈夫、ただちに影響はない例のアレだから」
「バカな。まさか」
　そこで、傭兵たちが寝室になだれ込んで来る。
「おいでなすったか。じゃ、殉愛（仮）はありがたくいただいてくぜ」
　さっと窓から飛び降りるザパン一味。
「く、ザパンを殺せ、いや、誰か、医療班を呼べ！」
　慌てふためく財津さん。

　場面転換。
　手術室に横たわる財津さん。ぐるりと白衣の医者に囲まれ、腹部あたりを内視鏡で手術されている。
「まだか、まだ取り出せないのか？」
「もうすぐです。…はい、取り出し完了しました」
　アルミ皿の上にピンセットで、白い特殊な布にくるまれた物体が置かれる。
「財津様、ダイヤをご自身で確認なさいますか？」と医師。
「いや、触れたくない。それよりもガイガーカウンターを早く」
「ありゃりゃ。こりゃすっげえ値です、ビンビンですぜ」
　スタッフがカウンターを近づけると、とんでもない音が鳴り響く。
「プルトニウムの塊ですぜこりゃ。おっサムライ、おっそろしい！」
　ぐったりと冷や汗を流す財津さん。
「財津さまぁ、お気を確かにぃ。お水をお持ちしましたぁ。ああ！」
　水を持ってきた別のスタッフが転んでしまい、水が財津さんにぶちまけられる。
「ゲホゲホ、ばかな、何をやっている。そんなことよりも、そのゴミを早く遠くに捨ててこい！」
「へぇ。どこに？」
「どこでもいい、とにかく遠くだ、二度と目にすることのない遠くにな！」
「承知しましたぁ！」
　走り去る二人のスタッフ。
「財津様、縫合完了です」
「うむ」
　手術室にスタッフが入ってくる。
「財津様、ガイガーカウンターお持ちしました」
「なに？ もうすでに測ったぞ？」
「あ、反応があります！」
「なんだと？」
「この水差しです。中に何か入っています」
　途端、先ほど財津さんにぶちまけられた水差しが破裂し、部屋中が水浸しになる。上から白い布が降ってくる。
「殉愛（仮）はいただいた。ザパンⅢ世。
追伸：頭を冷やすための汚染水は、さぞやお気に召されましたかな？」
「おんのれぇ、ザパン、許さんぞ！ 皆殺しだ」

　場面転換。
「うまくいったな、ザパン」と雑元。

「だぁから言ったろ。今回のヤマ、二人の手はわずわせねえって。ザツえもんちゃんも、置物よろしく座って目を光らせるだけで任務完了だったろ？ ま、予告時間はずれちまったけどよ」
「やっこさんの驚いた顔、見物だったぜ。しかし体の中にダイヤを隠すなんざ、また悪趣味なこった。よく調べたな、ザパン」と雑元。
「いや、どっからどう調べても殉愛（仮）の隠し場所だけはわかんなくてよ、直接聞くしかねえべって乗り込んでみたんだわ」
「なんだと？ マジでか、ザパン、そんな見切り発車に今回、俺たちを巻き込んでたのか？」
「では、あのとき拙者に波紋がどうとか言っていたのは」
「ぜぇんぶあの場で思いついたハッタリよ。財津さんが摘出って言ったから、ホレ、真珠みたいにアソコに入れてんのかと思ってカマかけてみたんだが。思わぬオカマ掘り当てちゃったわ」
「なんだそりゃ、相変わらず雑だなおい。しかしよく偽物のダイヤなんかで財津さんを騙せたな」
「あれれ？ あれを偽物って言うようじゃ、さすがの雑元様も耄碌してきたんじゃねえの？ あれは本物のダイヤよ」
「なんだって？」
「なぁに。殉愛（仮）の在り処はわからねえが、ただカッティングの特徴だけはいくらでも調べられたからよ。昔盗んだ、殉愛（仮）より倍ぐらいでけぇダイヤを闇ルートで職人にカッティングさせたんだわ、殉愛（仮）そっくりにな。今回のヤマ、そりゃ高くついたぜ」
「マジでかザパン、ダイヤ削ってまで、今回のヤマ、無駄にもほどがあるぞ」
「無駄じゃねえよ、雑元。あの財津さんは他人を殺して略奪した殉愛（仮）をさも自分の物のように喧伝した上、財津屋敷には何人たりとも盗みに入れませんって雑誌で豪語してたんだぜ。それをこの俺様が盗まずに誰が盗むよ」
「かー。バカだよザパンおめえわ。付き合わされるこっちの身にもなれってんだ。そうだろ、ザツえもん」
「確かに雑な計画ではござるが、拙者、今回は報酬さえもらえれば文句はないでござる」
「雑じゃねえよお二人さん、ちゃんと半年かけたんだから。ニセの殉愛（仮）でモノホンの在り処を探り出す。まさか財津さんが先にその手でザカジンを誘い出すとは思わなかったが。ま、目には目を、偽物には偽物を、ってか？」
「なんてグダグダ言ってる暇はねえみてえだぞ。奴ら来やがったぞ、ザパン」
　戦車で追いかけてくる傭兵たち。逃げるフィアット。急に横から出て来た戦車に追い詰められたと思いきや、出てきたのはザニ形のとっつぁんたちのパトカー。
「ザパアアン、たいほだああ！」
　妙に棒読みのとっつぁん。
「やばいぞ、とっつぁんだ！」と雑元。
「オッケーオッケー、そうこなくっちゃ」とザパン。
「まてえい、ザパアアン」とザニ形。
「ザニ形警部、ザパンは我々が捕獲する、この国で邪魔はやめたまえ。さもなくば君たちも巻き

添えをくうぞ！」財津さんが戦車のスピーカーから叫ぶ。
「いいええ、わたあしはインターポールから任命を受けて、ザパアンを捕まえにきたのでありまあす。そちらこそ、邪魔はやめてくださあいい」トラメガで叫び返すザニ形。
「かまわん、打て！」戦車から砲弾をぶっ放す傭兵たち。上空に戦闘ヘリもやってきて、様々な武器で攻撃する。
「ありゃりゃりゃ、市街地でそんな武器を使うとは。財津さん、国際法違反で重罪でありますよお。私は警部として、見て見ぬふりはできませんよお」
「君はここでザパンと共に死ぬのだ、ザニ形君。あの世から好きなだけ見張ってくれたまえ」
　ザニ形、口調が本気に戻る。
「インターポールから任命された私を脅しましたな、財津さん。あんた、本当に腐ってますな」
「知るか、寝言はあの世で言え！」と財津さん。
「あなたこそ、国際法廷で同じことが言えるかしら？」ザジ子、付近の屋根の上からバイクで飛び降り、ザパンと並走する。手にはビデオカメラとボイスレコーダーを持っている。後部シートにはザカジンが乗っており、ザジ子にしっかりつかまっている。
「しっかり記録させてもらったわ」
「ザジ子ちゃん、タイミングばっちし。ちゃんとザニ形のとっつぁんも連れて来てくれてサンキューちゃん」
「それはザカジンのおかげよ。彼がインターポールに証言してくれたおかげで、ザパンの濡れ衣も晴れたわ」
　戦闘ヘリからのミサイルをハンドルさばきで華麗によけながら、
「そりゃよかった。しかしその後部シートの男はなに、ちょっとぴったりくっつき過ぎじゃないの？」とザパン。
「あら、ヤキモチ？ それよりも、あたしにくれる予定のダイヤはちゃんと盗み出せたの？」
「え、それはまぁ……」慌てるザパン。
「くれる予定だと？ ザパン、おまえマジの話か？」と雑元。
「聞き捨てならないでござるよ、ザパン。拙者、タダ働きするくらいならここから徒歩で帰るでござる」車から飛び降りようとするザツえもん。
「違うって。ザジ子ちゃん、何もこんな時にそんなこと言わないでさぁ、全部あげるとは言ってないし」
　仲良くもめながら、戦車の砲弾を避けて土壁を駆け上がり、ヘリを雑元のバズーカで撃退するザパン一味。
「あら、そうだったかしら」
　そうこうするうちに、財津さんが乗る巨大な戦車が変形し、戦闘ロボットとなってザパンの前に立ちはだかる。「ザパン、ザカジン、おまえら、ここで終わりだ！」
「おいザパン、もしやあのロボも」と雑元。
「おお、初耳ならぬ初お目目よ。あんなの、聞いてないよ～」
「この肝心な場面でまた油断とは、ダメよダメダメでござるよ！」

「ちょっとケンカしてる場合じゃない、キャー！」
　窮地に陥るザパン一味。戦闘ロボットの攻撃でザジ子ちゃんが転倒する。
「ザジ子！」叫ぶ、ザパン。
「わはははは」笑う財津さん。
「ザジ子は俺にまかせろ、ザパン、あのロボをなんとかしろ！」
　ザカジン、ザジ子ちゃんを後部シートに乗せ、バイクを運転する。
「おお。もっちのろんだのクラッカーよ！ アルセーヌ家に、生まれた、男や、さかいにぃ！」
「それは別な人の歌！」全員つっこみ。
「ザパン、これをつかえ！」フィアットでロボに突っ込むザパンに向け、十手を投げるザニ形。
「この土壇場で十手って。とっつぁん、使い道あるこれ？ あ、そうだ！」
　十手の鉤にニセの殉愛（仮）を無理くりはめ込む。
「どうすんだそれ、ザパン」と雑元。
「え〜と、え〜と、えいっ！」とりあえず財津さんに向けてぶん投げてみるザパン。
「マジかザパン、雑にもほどがあるだろ！」と雑元。
「あれは、私の殉愛（仮）！」と財津さん。
　ロボが十手に向かって突進する。更に掴もうとするアームをスルリとすり抜けた十手が、操縦席のガラスを突き破る。勢いでダイヤが飛び出し財津さんの額に突き刺さる！
「うぎゃー！」財津さんの絶叫。

　場面転換。
　病室。
「もうだいぶよくなったみたいね、ザカジン」
　ザカジンの病室を訪れる、ザジ子ちゃん。
「……いろいろ、世話に、なった。ありがとう」うなだれて、礼を言うザカジン。
「あら、お礼なんていいのよ。それよりも、これ、預かってきたの」
　ザジ子ちゃん、ハンドバッグからダイヤを取り出し、ザカジンに手渡す。
「これは……」
「財津さんには無理だったけど、これが本物の殉愛（仮）かどうか、あなたなら一目でわかるはずだって。ザパンからよ」
「ザパンが？ なぜ？」
　ザジ子、咳払いして、
「ん、ゴホン。（声色をマネして）俺様みたいなコソ泥にとっちゃ、盗むまではお宝だが、手に入ったらもうありきたりなただの石コロよ。ですって。ホントもったいない。ま、あたしはニセの方のダイヤをもらったから文句はないけどね。それじゃ、ちゃお！」
「待て、なぜだ、命がけで盗んだのに、ザパンはなぜこんなバカげたマネを。……同情か？」
「そうねえ、あたしはザパンじゃないから本心はわかんないけど。ザパンにとっては、それが本当にただキラキラ光るだけのいらない石コロだから、じゃないかしら」

「石コロ……」殉愛（仮）を見つめる、ザカジン。
「でもザカジン、あなたにとってそのダイヤは、一族の誇りであり、家族の思い出が詰まった形見なんでしょ？
　ねえ。ザパンにとって盗むって行為は、道楽っていうよりは、生き様そのものなのよ。ノー盗み、ノーライフね」
　目を上げる、ザカジン。
「……ザパンは、今どこに」
「空港よ、今日の便で帰国するの」
　ベッドの上に新聞。タンカで運ばれる財津さんを逮捕したザニ形警部のVサイン写真が、新聞の一面を飾っている。

「財津さんの悪事をザニ形警部が暴く、か。お、財津さんの保険金詐欺事件についても載ってるぞ。なになに、ザパンに盗まれたと見せかけてダイヤの保険金をだまし取ろうとした財津さんだが、結局ザパンに本物の殉愛（仮）を盗まれる、か。これで一件落着だな、ザパン」
　雑元、広げていた新聞を閉じてザパンを見る。
　空港にて、飛行機を待つザパン。タバコをくゆらせている。
「まぁな」
「なんだ、浮かねえ顔して」
「いや、なに、大したことじゃねえが」
　タバコをもみ消すザパン。雑元、電光掲示板を見ながら、
「そろそろ出発だな。行くか、ザパン」
「ああ」
「ザパン」ザツえもん、隣で胡坐をかいたまま、ザパンに流し目で呼びかける。
　その目線の方向に、ザカジンが立っている。
「俺は、お前を認めない！」叫ぶザカジン。「道楽なんかで盗みをする奴を、俺は絶対許さない！」その手に殉愛（仮）を握りしめている。
「なんだあいつ。おい！」ザカジンに向かおうとする雑元を、手で制すザパン。
「いいのか？」いぶかしがる雑元。
　黙ってザカジンに背を向け、搭乗口へ歩き始めるザパン一行。
「俺は、お前らを認めたら生きていけない！ お前らを認めたら、殺された家族や仲間たちに、合わす顔がない！」叫び続けるザカジン。
「俺は、お前に、お前らに感謝なんて……」うつむいたザカジンから滴る涙が、握りしめた殉愛（仮）に落ちる。
「アバヨ！」右手を上げ、背中で別れを告げるザパン。口元に笑み。

　スタッフロール。（ってかスタッフって、G+Uのみだけど）

　スタッフロール中に、機内の三人の会話。
「ザパン。拙者、一つ気になったことがあるでござるが」
「ん、なんだ、ザツえもん」とザパン。
「さっきザカジンが握りしめていたダイヤでござるが、あれは、拙者に内緒で本物を勝手に渡したでござるか？」
「え、あれ？ いや、どうだったかな」とぼけるザパン。
「あ、そうだぞザパン。俺も気になってたが、ニセの殉愛（仮）もフジ子に貢ぎやがって、ってことはもしや、お前今回収穫なしじゃあるまいな？」
「ザパン、言いにくいでござるが、もし今回の報酬を踏み倒すような狼藉を働く場合は、拙者、この飛行機をただでは帰さんでござるよ」
「ちょっと、なに物騒なこと言いだしちゃったのザツえもんちゃん。あれれ？」
　そこにちょうど通りがかるCA。
「あ、そこの美人のお姉さん！ オレンジジュース、プリーズ！」
　お姉さんに手を伸ばすザパン。その腕に手錠かかる。
「んもう、美人ってあたしのこと？ 逮捕しちゃう♡」
　ごっつい美人が振り返ると、案の定、ザニ形のとっつぁん。
「とっつぁん、なんでそんなバカな真似を！」
「がっはっは、敵を欺くにはまず自分から。自分の気持ちを偽って女装したまでよ。そんなことより、ザパン、逮捕よ！」
「あら、気持ちを偽ってって言う割には、女装がとってもお似合いだことよ。おほほほほ」とザパン。するっと手錠を抜く。
「それで拙者を誤魔化せると思うか、ザパン！」ザツえもんの目がギラリと光り、雑鉄剣の居合切り。目にも留まらぬ早業で、ザパンたちの座る座席部分だけがくりぬかれ、飛行機から落ちる。機内、パニックに。
「ありゃりゃザツえもんちゃん、飛行機斬っちゃってどないするのよ」
「待てー！ ザパーン、逮捕だー！」飛行機から飛び降りるザニ形警部。
「とっつぁんもしつっこいよ！」
「男ってみんなこう。しょうがないわね、ったく」一人乗りのセスナでそばを通るザジ子。
「あ、ザジ子ちゃん、助けて、お願〜い！」
「待てえ、ザパン、逃げる気か！」とザニ形警部。
「ザパン、責任とってもらうぞ！」とザツえもん。
「拙者に分け前を！」と雑元。
「ひー、みんな落ち着いて。落ちるー！ これが本当のオチがつく、ぬぁんちって！」
「ザパーン！」一同つっこむ。

Fin.

（20年前くらいに思いついたルパンⅢ世の二時間スペシャルを、雑パンⅢ世へと雑化いたしました。リサイクルという以上に、深い意味はありません。あしからず）

『新しい道徳　その１』※第二十回　『明日死ぬかもしれない自分、そしてあなたたち』と『さくら』　前編より抜粋

　わかりやすい（勧善懲悪的）物語は、読解力も想像力も特に育まない。例えば中東情勢、複雑すぎて当事者たちも全体像を把握できないし、全てを解説するのは無理だってのはよく聞く話だ。民族と宗教の歴史が複雑に絡み合い殺し合う事情を、考える力を削ぐ教育で善と悪にあっさり白黒付けちゃいたいと権力者たちは思っている。例えばいつの間にかひっそりと有志連合に加盟しちゃってるこの国は正義だゾって言い張りたいワケだ。
　加盟の理由は長い物には巻かれろって対米従属が主だけど、自己保身したい権力者にとってそんなのは当然なんだろう。政治家が裏金もらってるのももう当たり前すぎて、むしろこの国の新しい道徳は「権力者が自己保身に走るのは生物として当然なので、権力者から利権をもらえるよう努力する人も多いですが、それが嫌な人もいます。あなたはどの立場を選びますか？」って、結論は各自が考える教育から始まるんじゃないのかな。
　更に俺の歪んだ目には、中東情勢はアメーバたちがシャーレの中で食い合いしている風景に見えるから、もはや反射的な殺し合いに善悪って物差しを持ち込むほうがナンセンスだ。卑劣な行為って断罪できそうなのはせいぜい、アメーバたちをシャーレに閉じ込めてそこに養分を供給し、顕微鏡で観察しては何がしかの利益を得る研究者の側に対してくらいだろう。
　あなたは研究者側、アメーバ側、人質側、その他たくさん側、どういう立場を選びますか？ それが簡単に善悪を決めない、混沌でリアルな道徳教育だろう。

『妄想の新旧・直木賞対決』※第二十回　『明日死ぬかもしれない自分、そしてあなたたち』と『さくら』　前編より抜粋

---

　こんな話したのには続きがあるからなんだが、俺の妄想ではAmyの『明日死ぬかも～』は、実は西加奈子の『さくら』って10年前の小説を元ネタにして、最近のわかりやすい物語にカウンター食らわしてるんだと思う（ちなみに前回の『殉愛』にもさくらって出てくるね）。つまり、新旧・直木賞対決だ。
　西加奈子って直近で直木賞取った作家で、最新作について（Uが好きな）椎名林檎ともテレビで対談したり、俺が好きなchappieのpal@popもインスパイアされて「さくら」って曲を書いちゃったり、俺の好きなせきしろって作家（「バカサイ」等）と共作してるし、期待して買ったんだけど残念ながら俺のための小説では全然なかった。面白くない人の日記みたいだった。
　もちろん度々書いてるけどクソ食うハエも好きずきだから、俺みたいな小理屈バエの好むクソじゃなかったってだけで、西加奈子自身は素晴らしい作家だと思うが、実は椎名林檎との対談もすっごい違和感あった。まず最新小説で最も伝えたかったテーマを作者本人がテレビで声高に力説するのも俺はどうかと思うんだけど、結局テーマは「信じるものを自分で決めよう」だそうで、気付いたらナレーションの深イイ朗読がカットインし、主人公のセリフ「信じるものを自分で決めよう」ってそのまま言っちゃった。あ、本文中にもちゃんと書く人なんだね、小説なのに。なるヘソ～、うん、親切。今それが一周回って逆に新しい発明、なのかな？ 決して読者をバカにしてるとかじゃなくてさ、ホラ、ちゃんと口で言わなきゃキモチ伝わんないゾ、タッちゃん、え、南？ って俺、だれ？
　こういう作家が今の読者には受けるから賞も取れたんだろうけど、俺としては最近の映画の予告編と一緒で、その番組だけでお腹いっぱい一冊読み終えた気にはなったよ。あとしきりに「小説は長くて辛い。歌は短くてすごい」ってこぼしてたけど、そりゃ言いたいことが結局「信じるものを自分で決めよう」13文字だったら上下巻は長いだろうよって、申し訳ないけどテレビに突っ込んだよ。大体、書く側が長くて苦痛だったら、読む側にとっちゃ長すぎて拷問だよ。作者がいくら短いって思っても、大概の読者には長く感じられるモンだろうからさ。
　本来ならこんなの内面で愚痴って終わりなネタだったんだけど、Amyとの比較ですっごい気になったから、ネットであらすじ調べて飛ばし読みで無理やり目を通した。以下、『明日死ぬかも～』と『さくら』に共通するキーワードをネタバレ全開で列挙する。

・両親、兄、妹、弟等が出てくる家族の喪失と再生の物語
・過去に起こった出来事を振り返りながら進む
・何事にも秀でていた伝説的な兄が突発的な事故に遭う
・兄の死が家族に重大な影響を与え、それを乗り越えるために家族が支え合う
・母がアルコール依存症になる
・書き出しが似ている（『さくら』は父親の手紙。『明日死ぬかも～』は祖母の格言）
・人じゃない何か（犬や幽霊）が自然体で唐突にしゃべり出す

・ゲロの話が出てくる

　ざっくりこれだけの共通点がある。んでこっからは俺の完全な妄想だ。もし俺がAmyだったら「なんだこりゃ？ あたしだったらこう書くわ」つって、上記のポイントを深く深く想像して掘り下げたら超面白い小説できたから、「やばいわ、これ出版したい」ってなるね。例えばアルコール依存症でも、二つの作品では描写の精度が段違いだ。『さくら』ではただの文字でしかないそれが、『明日死ぬかも～』では身を切るほどのリアルとして描かれている。震災を経た今、俺にとって読んでよかったと思える作品だったよ。

『新しい道徳　その2』※第二十一回　『ぼくたちは何だかすべて忘れてしまうね』と「いじめられていたら、とにかく逃げなさい」 後編より抜粋

---

まず誰でも読める公的な資料で心底がっかりしたのから、そのまま引用する。（ちょっと本気で腹をたてたから、Uが笑い飛ばすのを期待してる。気にすんな、考え過ぎだって）

---

甲状腺検査に関する中間取りまとめ （部会長取りまとめ案）
平成27 年3 月福島県県民健康調査検討委員会甲状腺検査評価部会
今後、仮に被曝の影響で甲状腺がんが発生するとして、どういうデータ（分析）によってそれが確認できるのか、裏返していえば、どういうデータ（分析）が現れなければ「影響はなかった」と判断できるのか、その点の「考え方」を予め示す必要がある。これが全くないと、「後付けで」評価がなされるかもしれないとの疑念をいたずらに招いてしまうこととなる。

---

俺ごとき素人でさえずっと「甲状腺ガンの数を調べるなら、例えば何人までが正常で何人からが異常なのか初めに概算して当然だし、しなきゃ後付けで言いたいこといくらでも言える」って書き続けたけど、震災から4年以上経って（言い訳の準備が整った今）やっとその議論が「全くない」とこから始まるってことだ。クソだよ。俺好みじゃないけど、この金色のクソにたかるハエはたくさんいるんだろう。一、二、三、四年過ぎて「ワザトダロ！」ってオチだ。（今流行のネタだよ！）

震災後、福島では定期的に御用学者たちが集まって会議してる。今どういう議論になってるか簡単に要約すると、国立がんセンターのデータと比べて甲状腺がんの発生率が60倍高いって東大教授が言ってる。これは事実だ。そしてその事実を基に、過剰に診療してるせいだ、って主張もしてる。
でも、県立医大は過剰診療じゃないと言ってる。適切な検査・手術だと。
じゃ、結論はどうなのかっていうと、「現時点で結論づけはできないが、放射線の影響とは考えにくい」「最終的に放射線の影響があるかどうか判断するには、最低でも10年はかかる」となる。

ここで国語の出番だ。結局、この議論から導き出されるのはたった一つの事実だ。
福島では甲状腺がんが60倍発生している。これだけ。
理由が不明であれば、発覚してても公表する必要はない、これは汚染水が漏れた際の東電の見解だ。
福島で甲状腺がんが60倍発生していても、理由は不明だから放置してかまわない。これが国の見解だ。
だからこの会議の主役は国民じゃない。主役は国家経済だ。

ここで俺はこの国の新しい道徳を提示したい。
原発反対派も推進派も、被曝で国民に健康被害が出ることを良しとは思ってないだろう。だがそれは偽りの道徳だ。
「被曝で苦しめ」

あー、間違ったかも。「被曝を楽しめ」かな。まぁどっちも意味は一緒だよ。要は文句言うなってことだ。
それがこの国の新しい道徳だ。国民は経済のため被曝に悩んだり楽しんだりできれば早死にしたほうがいい。だってこの国の主役は経済なんだから。原発が爆発して、被曝して、老人や子供がどんどん苦しんだり楽しんだり死んだりしていけば、国としては医療費の削減につながる可能性もあるかもしれない。経済が主役ならそれだって国是だ。我々はそういう国に生まれた事実を自覚し、覚悟し、生活する。それがお国のためってことだ。
だから「お国ばんざーい！」って人々は、欲しがりません死ぬまではつって、生活費削ってでも今以上税金納めて、体壊したり国から年金もらう高齢者になったら桜の下で腹切りするのも国是だろう。それが一番お国のためだよ、だって国の主役は経済なんだから。俺は絶対イヤだけどね。

『モヤモヤ格差』※第二十一回　『ぼくたちは何だかすべて忘れてしまうね』と「いじめられていたら、とにかく逃げなさい」 後編より抜粋

たとえば、格差社会というテーマがある。
俺は格差社会って言葉も定義が曖昧だから好きじゃない。「日本は飛び抜けた金持ちが少ない中流の国だ」とか、「いや子供6人中1人は貧困層だ」とかの議論が並行している。これはわかりやすい物語に言葉が誤魔化されているからだ。
まず議論すべきは、格差とはいったい何かを具体的に定義づける、わかりにくい物語の方だ。
例えば原子力ムラの天下り管理職と、現場の下請け作業員との間に一体いくらの賃金格差があって、彼らがそれぞれどんな生い立ちで今の職業に就いて、職務内容、家族構成、学歴、抱えている悩み等を細かく調べ、そこにどんな種類の格差が存在するのか検証することだ。
だがもちろんこの国から天下りがなくなることも、作業員のピンハネがなくなることもないだろう。だから格差がなくなることもないって結論はもう出てる。
ついでに最近、某有名総研会社の統計が出てるんだが、割合としては以下のようになる。

つまり、2割程の純金融資産3千万円以上の世帯が、国内の資産の6割程を保有しているそうだ。
逆に8割程の3千万円未満の世帯は、国内の資産の4割程しか保有していないそうだ。もしこれを1千万円未満で区切れば、国内の資産の3割～1割くらいしか保有してない感じだろう。（ちなみにアベノミクスで「古くからの資産家が株式等で儲かった」ってそこに解説あったよ）
これを格差と呼ぶのかどうか定義がはっきり定まってないし、自分がどの立場にいるかで変わる話でもある。まぁ薄い大量消費の文化では、定義づけの議論はなされないで忘れ去られるだろう。

『逃走という闘争を通そうとする言葉』※第二十一回　『ぼくたちは何だかすべて忘れてしまうね』と「いじめられていたら、とにかく逃げなさい」 後編より抜粋

---

　岡崎京子の『戦場のガールズ・ライフ』を買って少しずつ読んでるんだけど、この人の忘れ去られなさはなかなかだよ。そしてまた「いじめられていたら、とにかく逃げなさい」って2006年に鴻上尚史が書いた文章も再び話題になってる。それもすごいことだ。それについて少し書きたい。
　鴻上の文章は、今この瞬間いじめを苦にして死ぬ子を一人でも減らすのが目的で、生死の狭間にいる子供に向けた一対一の緊急メッセージだ。その子が死ななければ成功だから、関係ない第三者があれこれ賛否言ってもあんま意味はない。それより自分だったらどの言葉で死を食い止めるのか、または死んでも別にいいのか、自身の言葉をさらす方がフェアだろう。
　そこで俺だったらどう書くかって話なんだが、鴻上の本や舞台で人生の踏み外し方を習った俺だし異論は特にない。ただいじめで苦しんでる子はそもそも「自分がいじめられっ子だと認めて逃げる」行為を不名誉と嫌がる可能性があるから、（「逃げろ」とか「遺書を書け」って言葉が持つインパクトの意味は非常にわかるけど）「周りより一足大人になって視野を広げよう」「イヤなことは大人に相談するのが一番良い抵抗」「痛みを避けるのは動物として当然の行為で、何ら恥じることはない」というような文言も付け足せばどうかな、とは思う。「友達とふざけてるだけだから、自分はいじめられっ子じゃない」と意地張って気づいたら死んでる子もいるだろう。（前にDVと被曝について書いたけど、いじめって言葉を被曝に入れ換えても大体意味は通じるだろう）

『春ゲナイ』※第二十一回　『ぼくたちは何だかすべて忘れてしまうね』と「いじめられていたら、とにかく逃げなさい」 後編より抜粋

---

　さて、特攻隊員の手記から今の我々が学ぶことは多い。では原発作業員の手記はどうだろうか。

　俺は今までメディアの原発作業員に関する特集はできるだけチェックしてきたけど、ほとんどの作業員が「会社に口止めされてるから」取材を断ってる様子も紹介されてた。でも、全員じゃない。

　今までずっと「たった一人か二人」のマンガ家やブロガーは情報発信を許されてる。しかもたくさんの読者がいて世間に望まれてる情報なのに、なぜか公開できる人は限られてる。顔出しのドキュメンタリーもいくつか観たけど、所詮十数人しかメディアで声は伝えられていない。

　マンガやブログに書いている程度の内容なら、今まで作業に従事した何万人だって本人が望むなら公開してもいいはずだ。つまり、彼らの生い立ちや悩み、待遇や現状など、前線で戦っている人たちの声を今すぐ、文化は集める必要があると俺は思う。先の大戦みたいに、終わってから美談にしても遅いからだ。

　そして前から言ってるけど、これは春樹がインタビューするのが一番適任だろう。間違いない。国民全員が「被曝に文句言うな」って新しい道徳の虜になっている以上、一丸となって彼にノーベル平和賞を取らせなきゃ我々は犬死にだ。

　というワケで毎夜、枕元にでっかいトランシーバー置いて春樹に電波送ってんだけど、俺のドラゲナイはやっぱ届いてないんだろうね。グラチュレイションが足りないんだな、きっと。

　というワケでいい小説だったよ、『ノルウェイの森』。いや、『火花』ね。前半はどうしようかと思ったけど、最後のほうがそれなりだった。少なくとも西加奈子よりは面白かった。「たぶん西加奈子よりは面白い」って帯に変えたほうがいいよ、たぶん。だって煽りすぎだもん。「この物語は、人の心の中心を貫き通す」って、流石に仰々しすぎる。しかも「人の心の中心を貫き通す」って言葉自体、人の心の中心を狙いすぎてる割に手垢にまみれてて、貫通するにはナマクラなコピーだよ。作者自身は「あほなりに真剣に人間を描きました」的なこと言ってるワケだから、むしろそっちでいい気がする。

『フミ嫌ート』※第二十三回　「うどんから目を離すな」と「ウマシカを好きだなんて貂犀かも」より抜粋

　ちょっと前にドローンが官邸にセシウム砂を運んだ件あったけど、狙いが官邸だと正直、意外性がなくてつまらないアートだと思った。
　どうせなら、原発周辺の被曝してるけど持ち運んでも問題ない砂を都心の駅前にアートとして（許可を取って）撒くとか、砂にタンポポの綿毛を付けて「目に見えない放射性物質がこのように全国に運ばれていますよ」と可視化させるアートを（許可を取って）展示するとか、そういう合法なのをやってほしかったな。

# 『新しい道徳　その３』※第二十三回　「うどんから目を離すな」と「ウマシカを好きだなんて貂犀かも」より抜粋

あと、春樹さんが自動車事故と原発事故の違いについて言及してた話もあった。
前にUともこの件でやり取りしたけど、原発事故と自動車事故は構造的に近いしむしろ同列に並べる問題だと俺は思う。
確かに、個人が起こす自動車事故と、国策で稼働させて最悪の事故が起こった場合、国土の何分の一かが避難地域になるような原発事故では、責任の所在は違う部分もあるだろう。
ただ、原発も車も国家経済にとって最も重要な産業の一つであり、今までもこれからも国策として推進されている。これらを停滞させることは国益（と利権）に反する、極論すればどっちも必要悪だ。だから、原発より車の方が危険って論法はあんま意味なくて、ボクチンより〇〇くんのほうが悪いってダダこねる幼児と一緒だろう。
もちろん、自動車事故の対策強化や道路改革もしたらいいし、事故防止やエコの観点から自家用車をやめてバスや電車に乗ろうとかのキャンペーンはずっと前からある。社用以外の自家用車を段階的に禁止にするとかも考えられなくはないし、原発や車と今後どう付き合っていくのかって議論が本来は必要なはずだ。
ただ広告収入とかの経済が優先される社会で、車を減らせなんて真剣に言いだすヤツはいない。まさに効率（と利権）のために犠牲者を無視する、ありがたい御国の誕生だ。
だったら前から言ってるけどこの国の道徳を変えたらいい。「国家経済のために国民の生命や尊厳は犠牲にしろ」って。実際に今そうなんだから。
たとえば、集団的自衛権で派遣されるJ隊員のリスクが上昇するしないって議論もあるけど、現状で原発事故後の周辺住民や作業員の被曝リスクも認められてないんだから、J隊員だけリスクを認められるなんて虫が良すぎる話だろう。御国のために国民は犠牲になるのがこの国の当然の道徳だ。
ちなみにこの件に関連して今ネットだとどんな話題があるかを書き留めておきたいんだが、震災直後の2011年5月に福島県立医大が開催した「健康管理調査スキームについての打ち合わせ」って会議があったらしい。これは県の公式HPで今も閲覧可能なんだけど、議事録の公開を市民に求められたのに対して、「メモや議事録は存在しないので公開できない」って回答を県はしてた（諮問第95号　答申）。
でもその議事録はやっぱりあったって今更になって暴露されて、そこで中心となる大学教授が福島は「国際的には最大の実験場という見方がある」から、県が予算をとって主体的に調査を行えって発言したようだ。年間１ミリシーベルトの被曝でも補償がいるって話も当時はしてたらしい。でもこの議事録もネットでは閲覧できるけど、今んとこどの新聞もテレビも特に報じてないだろう。
更に最近の学会報告だと福島の小児甲状腺ガン検査の後、摘出手術を行った79例中、リンパ節転移は約59例（75%）、肺転移が3例（4%）だそうだ。これも特に報道はない。被曝云々は置いといても、ここにある一つ一つの痛みについて春樹さんには言及してほしかったけどね。まぁ、

出版社が止めたんだってハルキストな俺は解釈しよう。

『ウマシカうどん』※第二十三回　「うどんから目を離すな」と「ウマシカを好きだなんて貂犀かも」より抜粋

---

　鴻上さんなら実際自分で書きそうなんだけど、「ある劇作家が新聞に自殺から逃げろ、と書いたせいで、日本全国で遺書を書いて集団家出する学生が急増し社会問題になった。裏社会では学生たちが人身売買される事件も起きる。社会の秩序を乱したとして世間から叩かれ追いつめられる劇作家と、それを守ろうとする学生たち」の話。
　マスコミに詰め寄られ逃げる劇作家をかくまう学生たちの地下組織。そこに集う学生たちは、都道府県ごとに逃げてきた目的が違う。自殺から逃げた東京出身者、原発周辺から逃げた福島出身者、米軍基地周辺から逃げた沖縄出身者、噴火から逃げた鹿児島出身者、地震から逃げた神奈川出身者、津波から逃げた宮城出身者、土砂災害から逃げた広島出身者、自動車事故から逃げた名古谷出身者、熊から逃げた三重出身者、うどんから逃げた香川出身者等々。
　当人たちにとっては、どれも同じ脅威だ。どれが一番怖いか、優先順位もつけられない。だが最終的には、どこかで折り合いをつけて、前を向いて生きるしかない。しかし、うどんだけのけ者にされる。なんでうどん？いえ、 県ごとうどんにのまれようとしているんです！ うどん県だからね。仕方ないよね。
　ところが、世間をうどんが襲う。うどんの脅威を思い知らされる一同。
　うどんを恐れるな！ 立ち向かえ！
　うどんに対抗するため、一致団結する一同。
　逃げるな、立ち向かえ、といくら外野が言っても、結局前線で戦うのは孤独な一人一人でしかない。最前線に立たされているのは他でもないお前自身だ。お前が死んだら戦いはそこで終わってしまう。生き延びたければ死なないための、戦わないための戦いを自分の頭で実行するしかない。
　うどんに殺されるな！
　なんかこの後うどんに殺されないための美味しいレシピの紹介とかいろいろあったりするんだけど。思いがけない物が脅威になるし、他人から見てバカバカしいと思うような戦いでも自分を守るためには必要だって感じの話。
　まさにこのウマシカがそうであるようにね。

　確かに『ドラゴンボール』とか『キン肉マン』に細かい理屈を求めても無駄なように、巨人もちょっと深刻なサイヤ人とか悪魔超人の類だと考えれば、納得もしやすい気がする。悟空もキン肉マンも巨大化してた時期あったしね。
「人間活動が、リアリティをもっていない」って部分は、最近のフィクションに対して俺も感じることが多い。『進撃～』は初めから、コスプレとかエヴァとかオタク文化を意識してると俺は感じるから、内輪ウケ同人誌ノリの「文化内文化」って雰囲気もあると思う。
　一般論だけど、食事も脂肪やタンパク質や炭水化物その他をバランスよく摂取するのが大事ってのはよく聞く話で。今の文化は「脂肪好きには直脂肪」みたいな、複雑な味わいの機微よりもわかりやすい甘みと柔らかさ重視で咀嚼力を必要としない感じがする。世界観のリアリティより先に、とりあえずダンジョンありき、妹ありき、モンスターありき、中世っぽい雰囲気ありきみたいな、萌えマーケティングに乗っかってる感じ。
　ただ『進撃～』はそれだけじゃない、広く世間に訴えかける深刻さもあるからメディアミックスに成功したんだろう。でも完結しないうちにアニメに実写にCMにスピンオフにってやると、原作がどんどん薄まって巨人も矮小化しちゃう気がする。

# 『別冊について一言』※第二十五回　『Z』と『世界の半分を怒らせる』より抜粋

　別冊は「選択肢が一つしかないゲーム・ブック」を想定して書いた。「私は思い出す」という選択をして、次のページに進み、終わりからまた最初へループする。
　できれば世界の誰も怒らせずに、様々な考えに寄り添う影になれたらいいと思うけど、実は想像以上に手厚く慈愛に満ちていたこの世界に気づいてないだけの、単なる無意味な勘違いであれと願う。

『ドラマ化がミポリンって……』※第二十六回　『賢者の愛』と「ネトウハ♡」の逆襲より抜粋

　まず『火花』くらいの処女作でわざと又吉に受賞させ、盛り上がる世間に向け「又吉君が羨ましい♡」とか会見したりして、若い頃にさんざ自分を叩いたマスコミや自分がとれなかった芥川賞に、数十年来の復讐を果たしてるんじゃないかな、山田詠美は。
　って裏の裏を勘ぐるくらい、山田詠美の『賢者の愛』が俺には面白かった。人間の性（せい／さが）と業をめぐる話なんだけど、沖縄の壕（ガマ）並みに底深く掘り下げられてた。
『火花』の輝きが俺にとって「★★★」だとしたら、『賢者の愛』は「横綱級」だね。同じ純文学でも戦う「土俵」からして全くの別物だった。卑近な例えをすれば、『火花』の「お笑い」に関する説教は俺にとって、「自腹の飲み会でしっくりこない長説教に付き合わされた」感じだったけど、『賢者の愛』の「性愛」に関する説教は、「納得できない箇所もあるけど妙に引き込まれちゃう下ネタ」って感じだった。
　ちなみにどっちの作品も巷では「★★★」くらいの評価だけど、もちろん売り上げや注目度には雲泥の差がある。
（特に悲観するワケではなく単に事実として「時代は軽くなる」以上、新品の本を購入して読む層は今後も減少し、話題に加わるための情報ツールとしてたまにブームの本を購入する層が増えるだろう。「芥川賞のもう一人の受賞者は全然売れてない」という事実が、それを如実に物語っている。本というメディアは「基本的には売れない嗜好品でマニア向けだが、たまに当たると一般層も購入して市場が増える」という認識が常識化しつつある）
　そんな『火花』フィーバーを巻き起こした当事者の一人として、浮かれる世間を冷ややかにほくそ笑む山田詠美。まさか穿ち過ぎだろうし本人は至って嬉しそうだけど、あながち書きすぎたとは思ってない。『賢者の愛』を読めば、これでもまだ甘っちょろい表現で「エイミー関」にむしろ失礼だと気づくよ。さすが横綱。さてここまで、ものすごく誰の役にも立たない宣伝をしてみました。

　ちなみにあえて例えにふさわしくない沖縄のガマを引き合いに出したのは、最近「島唄」の歌詞に込められた想いを知ったから。「集団自決」はしたくないと改めて思った。いちいち強制か自主的か、侵略か自衛か、左右の議論はどうでもいい。とにかく俺は絶対「集団自決」はしたくないから、各方向に向けて黙祷を捧げると共に、どうすれば俺が「集団自決」しないですむかを考えた。
　その結果、Uみたいな生き方が最も適切だと感じた。努力して自分の腕一本で世界を渡り歩ける実力を身につければ、有事の際は自分で、戦うか逃げるかを選択できるから。今回はこの流れね。

『猫型ロボット作ってドラえもん入れず』※第二十七回 「はみだしウマシカさん　その９」より抜粋

---

　最近、新旧の『ドラえもん』を見比べる機会があって、やっぱ昔の『ドラえもん』は表現も言葉づかいも荒っぽくて、ジャイアンのいじめものび太の報復も強烈だった。
　そこでいろいろ考えた結論から書くけど、のび太は子供時代のF先生を投影したキャラクターであり、いじめられっ子が感情移入して、いじめっこを返り討ちにする爽快感や、明日を生きる元気や勇気、それにちょっとしたアイデアやアクションのヒントを授けてくれる、それが『ドラえもん』の最も重要な魅力だろう。
　未来の道具やドラえもんとの友情、のび太の成長も大事だけど、いじめに負けたくないという子供たちの共通した思いがあるから、世代を超えてこれだけ世界中に広まったんだと俺は思う。
　だから、「のび太が可哀想。いじめを助長する」って理由で、ジャイアンがのび太をいじめる回だけ放送しない国もあるってネットで見たけど、それは仏作って魂入れずであり、猫型ロボット作ってドラえもん入れず、だと俺は思う。
　文化に対する抗議って超要約すると「可哀想」「助長する」って形にまとまる気がするけど、それでは実際、アニメの中でジャイアンがいじめをやめたとして、現実のいじめがなくなるか。答えは簡単だ。ジャイアンがいじめる前からいじめはあった。そしてジャイアンがいじめをやめたからといって、現実のいじめは当然なくならない。文化が自粛／萎縮して表現をやめたら、問題を無視して現実から離れるだけだ。
　子供時代のF先生と同じいじめられっ子がのび太に共感し、明日を生きる元気や勇気、アイデアやアクションのヒントを得て欲しいという思いで、F先生は『ドラえもん』を描いたはずだ。
　子供時代のF先生は何をしてもダメで、漫画だけが生きがいだったそうだ。そういうダメな子供にとって『ドラえもん』は逃げ道の一つであり、文化の重要な役割の一つだと俺は思う。
　現実のいじめを描かなければいじめられっこは無視されたままで、現実に届かない単なる空想には、共感を呼ぶ魅力はない。

　さて、卵のメタファーにはいろんな意味があるって春樹は言ってる。弱い個人が権力に殺されるって意味。我々は誰しもが卵で、尊厳ある魂を殻の中に持ってるって意味。
　そして春樹は、たとえ間違っていても自分は常に卵（=個人）の側に立つ、逆にどんな国も支持しないって言ってる。これはもちろん生まれた国も含め世界中どの国も、そしてたぶん組織も支持しないって意味だろうと俺は受け取った。二人以上の組織は極論すればすべてシステムとなり、壁の側になる可能性があるからだ。
　つまりこれは政治問題だけをどうこう言ってんじゃないはずだ。もちろんイスラエルは壁の側で、パレスチナは卵の側って構図はある。イスラエル側もこのメタファーを歓迎はしないだろうから、わざわざ呼ばれた先で物議を醸すようなスピーチをする春樹の公平さを評価したい気持ちはある。でもそれも単純な考えかなって思う。

　この世界に、絶対的な善悪や正誤は存在しない。無差別殺人するテロリストにも大義面分があり支え合う家族もいたりするし、純粋そうなアイドルだって恋愛坊主する。
　人々は便宜的な優しさと残酷さの間で日々選択しながら行動して生きてる。もちろん完璧じゃないから、何らかの壁にも突き当たるだろう。それが人間だ。
　春樹にとって重要なのは善悪や正誤じゃない。人間を描くことだ。一人一人に宿る魂の尊厳を認め、個々人が壁と対峙する様を深くえぐるのが作家だと俺は受け取った。
　作家としての核心であり、ある意味では業だと思う。

『未来妄想図Ｉ』※第二十八回 「はみだしウマシカさん　その１０」より抜粋

　ちなみに俺のこうなってほしい未来妄想図は、原発の作業員とか駆けつけ警護する某J隊員の年収を最低でも一千万円以上、できれば年収一億円以上にして、万が一殉職されても遺族は一生安泰を保障する、そうなれば安保でも原発再稼働でも好きにしたらいいと俺は思う。
　その原資として、政治家とか天下りの年収の上限を一律一千万円にして、どの公務員や天下りがいくらもらってるかを徹底的に透明化して、今後どのくらいもらうべきかの国民投票を公平にやればいいと俺は思う。
　きっと何年たっても 未来妄想図は ほら 思ったとおりに かなえられない けどね。

# 『ゼロ円通貨』※第三十回　『独立国家のつくりかた』とコピーロボットより抜粋

　数年前、坂口恭平の本を何冊か読んで、「ゼロ円通貨」の可能性について考えたことがある。前に言ったっけ？
　貨幣的には全く価値のない電子通貨で、一人につき1ゼロ円しか持てない。
　例えば、いただき物とかお手伝いの御礼として、一回につき1ゼロ円を払う。
　ただ、1ゼロ円をもらった方は蓄積されず、1ゼロ円のまま。
　そして、1ゼロ円払った方は新しい1ゼロ円が、ゼロ円国家から無限に補充される。
　この貨幣の価値はお金じゃなくて、「AさんがBさんに何をしてあげたか」って履歴がネット上に保存されること（公開非公開は別として）。
　誰かが誰かに何かをしてあげた奉仕の履歴がどんどん、ネット上の日本地図に、あるいは世界地図に→矢印となって無数に表示される。これがゼロ円通貨の価値。まぁ似たような何かはきっともうネット上にあるんだろうけどさ。
　こういうシェアの考え方と、欲しい人とあげたい人がピンポイントで繋がるネットは、抜群に相性がいいと思う。
　U、こういう仕組みつくっちゃいなよ？

『ブラックフラワーチャレンジ』第三十回　『独立国家のつくりかた』とコピーロボットより抜粋

　って流れで話が更に飛ぶんだけど、三年前の「丸刈りの誕生」あたりから始まった俺らのやり取りが、三十回目にして一周した気がする。
「誰に向かって謝ってんの？」って違和感において、最近の芸能人の謝罪はあの時と同じ（冬の風の）臭いがした。
　今後働かなくとも二生くらいは暮らしていけるだろう金持ち中年アイドルグループを可哀想とか心配しても、惨めなのはむしろ自分の方じゃない？ ブラックだ奴隷だって騒いでも、国を守ってる原発作業員等の本物のブラックさや待遇改善には誰も全く無関心じゃん。
　やっぱ原発作業員も防護服でもっと歌って踊って作業しないと、世界に一つだけの花は咲かせられないのかな？
　ってことで「ブラックフラワーチャレンジ」って企画を考えた。我こそは彼らよりも断然ブラックで奴隷ですって自覚ある猛者たちが、あの曲で踊る動画をアップして待遇改善を訴えるっていう。例えば介護とか育児とか風俗とか作業員とか（難民とか）の皆さんが顔隠すマスクでも付けて、あの曲で連携して踊ったら誰が本当のブラックなのか、みんな考えるんじゃないかな。

# 『コピーロボット』※第三十回 「はみだしウマシカさん その11」より抜粋

コピーロボット

生きてると　いろんな選択肢があるその度に

コピーロボットが現れて

自分が歩まない方の人生を

コピーロボットが選んで　生きてくれたらいいのに

そしたら　たびたび　たくさんのコピーロボットと

記憶の共有をして　いろんな人生を体感して

悲しんだり　楽しんだり

つけた傷の痛みをこらえたり　ときには笑いもこらえたりして

全ての記憶が混ざり合って　プラスマイナスゼロになって

早まった選択も　泣いて捨てた選択も　最後はみんな

どれもただ　大切な思い出の一つとして

たくさんの人生を　いつくしめるようになるのに

たったひとつしか人生を選べないせいで

当たり前に素晴らしかったはずの人生が　急に色あせて

ただひとつしか人生を選べないせいで

本当はそこにいたかもしれない　コピーロボットの背中を

こんなにも　目で追ってしまう　いないのに　そんなのいないのにね

# 『アイネクライネ読解』※第三十一回　『アイネクライネ』と台湾事情より抜粋

まず、本題に入る前の導入として、割と流行の米津玄師『アイネクライネ』を読解する。

この歌詞の核心は、「誰かの居場所を奪い生きるくらいならばもう　あたしは石ころにでもなれたならいいな」から始まって、「あなたが居場所を失くし彷徨うくらいならばもう　誰かが身代わりになればなんて思うんだ」って対になる部分を超えて、最後に「あなたの名前を呼んでいいかな」で終わるところだろう。

自分一人だけで生きてると、まぁ自分なんて消えてもいいか、他人を振り回して生きるなんてイヤだ、って思うこともある。

でも、あなたという大切な他者が現れて「あたしの名前を呼んでくれた」り、自分を必要としてくれる。それが嬉しくて、自分からも「あなたの名前を呼んで」必要としたくなる。そのためには誰かの居場所を奪ったり身代りにするのも、見ないふりする。

すごくわかりやすく構造的に練られた歌詞だし、BUMP OF CHICKENの『オンリーロンリーグローリー』とか、RADWIMPSの『あいとわ』とかも思い出すね。

一カ所、『産まれてきたその瞬間にあたし「消えてしまいたい」って泣き喚いたんだ』って部分だけは個人的にちょっと気になるけど。詩的な表現として理解はするんだけど、赤ん坊の泣き声は絶対に「生きたい」であって、「消えてしまいたい」ではないと俺は思うから。

その「生きたい」って泣き喚いてたはずの口から、やがて様々な挫折を経て「消えてしまいたい」が出てくる成長の過程が文学なんじゃないかな。まぁこれは別の話だね。

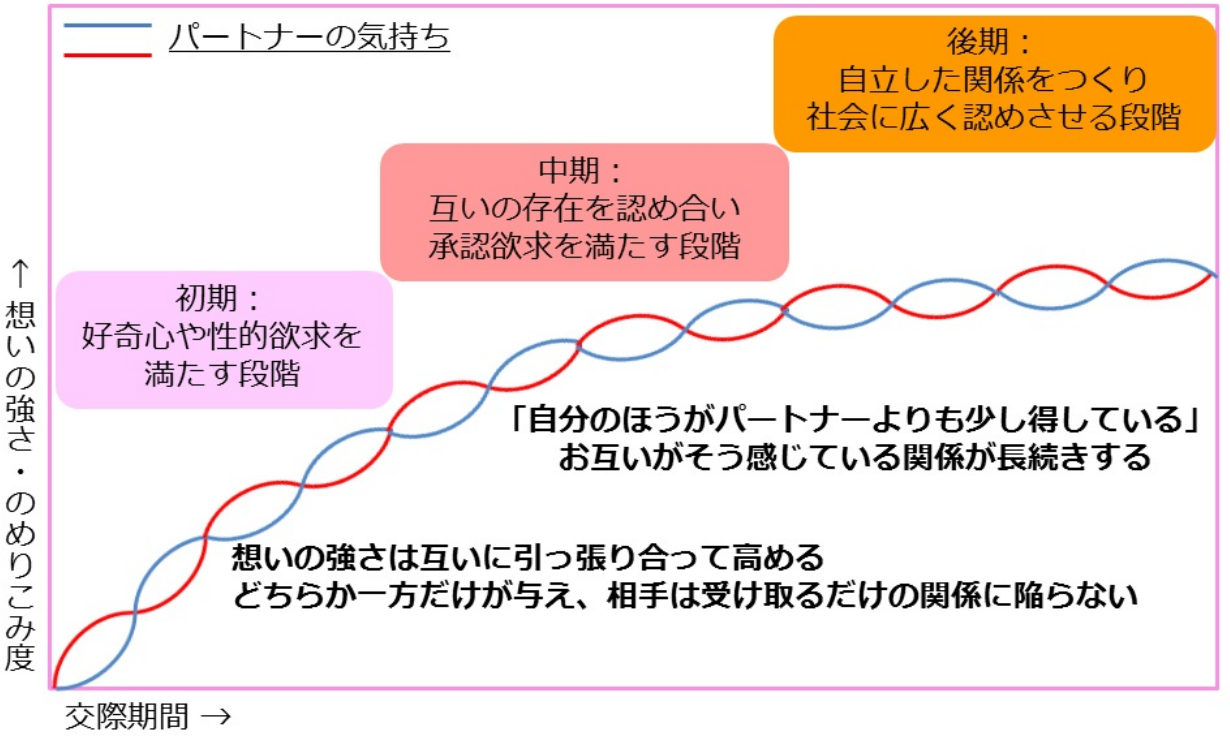
さてここから、本題の恋愛曲線につなげます。

一般論として、恋愛初期には男性のほうが女性より盛り上がりやすく、後期には女性のほうが盛り上がりやすいとか言われてて、それを恋愛曲線で説明されてるのは知ってる。

でも俺は「どうすれば良好に（冷え切らず）長続きする関係がつくれるか」ってことにしか興味ないから、理想の恋愛曲線について書く。

これは恋愛だけじゃなくて、友達や社会や人間関係全般に言える話だと思う。人が人と関係を成就させて長続きさせるためには、いくつかのルールがある。すごく常識的なギブ＆テイクで、道徳の教科書に載ってても おかしくないと俺は思ってる。

まず俺の考えを簡潔に図としてまとめると、下図のようになる。




この図は、3つの観点を一つにまとめたものだ。

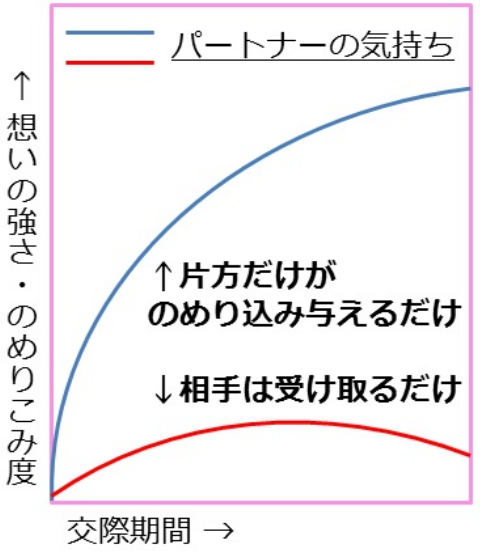
1つ目の観点は、「長続きする夫婦は、自分のほうがパートナーよりも少し得している、と妻も夫も互いに満足感を感じている」という統計の結果だ。夫婦関係を良好に長続きさせるためには当然、背伸びしない、無理のない「等身大」の関係が望まれる。

自分だけが損していると感じ、我慢を強いられる関係は長続きしない。逆に自分だけが得しすぎていると感じても、互いのバランスが崩れたり、生活に無理が生じたりする。百万本のバラをあげたら絵かきだって破産するみたいにね。

2つ目の観点は、「恋愛の段階は、三つに分けられる」という理論だ。

初期は、互いに好奇心や性的欲求を満たす段階。
中期は、互いが互いの存在を認め合い、お互いがここにいていいという、承認欲求を満たす段階。
後期は、互いが認め合った関係を、結婚などを経て社会にも認めさせていく段階。ここは離婚などしなければ一生続く、とても長い段階だ。

3つ目の観点は、「どちらか一方だけが与え、相手は受け取るだけの共依存に陥らないために、お互いが想いを高め合う必要がある」という理論だ。
「恋に恋する」とはよく乙女の修飾語として用いられるが、これは「相手の気持ちに関係なく恋にのめり込みたい」という欲求を表している。それが行き過ぎれば一方的なストーカーだし、そのままだと恋愛関係が成立しても下図のような、一方だけがのめり込む状態になり、長続きしない可能性が高い。




長続きさせたければ、互いに想いの強さを確認しながら、足並みを揃えて引っ張り合う関係に改善するのが理想だ。そのためには契約や相談、我慢や調整の他、互いの意見をぶつけ合わせる粘り強い交渉も必要だろう。
逆にサプライズやロマンスはむしろ、邪魔になる場合も多い。
つまりものすごく卑近に例えると「旦那が金時計を売る前に、妻はちゃんと髪を切る相談をしろ」って話だ。だっていちいち旦那が食材を買ったら妻が鍋を売ってたり、妻が家具を買ったら今度は旦那が家を売ってたりしたら、ロマンスはありあまっても生活は破たんするでしょう？
旦那は原発を吹き飛ばしたのに妻はウラン燃料を買うのをやめられない、とかもね。

# 『ラピュタ２』※第三十二回　「恋する十四松」と**M-1**グランプリより抜粋

　この前喫茶店で、隣にいた男性がこんな電話してた。

　うん、俺としてはね、もうバルスを唱え終わっちゃった後のラピュタなの。そう。『天空の城ラピュタ』に例えるとね。知ってる？ だよね。祭りにもなるよね、バルス祭り。
　いや、つまりね、バルス唱え終わって、ラピュタが崩壊して、ムスカもメガネメガネして落ちちゃって、結局ラピュタはテト（キツネリス）とかロボット兵を乗せて、更に上の天空へ昇ってくよね。
　俺はパズーとしてそれを下から、ドーラの空中海賊団とか、シータと一緒に見上げて、手を振ってるワケ。ありがとうラピュタっつって。
　そう、かかってるかかってる、後ろで井上あずみの「君をのせて」かかってる状態ね。ある意味、チェックメイトみたいなね。ドーラと息子たちが手柄の宝石を見せ合ったりしてね、ニヒッつって、これから地上で楽しく暮らしていきましょうってね。
　そういう状態なの、つまり今。良いこともあった。辛いこともあった。いろいろ乗り越えて、やっとラピュタにサヨナラできる。新しい人生に向かう気持ちになった。
　その状態でさ、今、君ともう一回やり直すってのはさ、つまりいきなりパズーが、「それじゃ僕、もう一回ラピュタ目指します！」って無邪気に言い放つようなもんだよ。エンドロールも半ばにしてさ。まだ宮崎駿って監督のクレジットも出てない状態で。そうそう。電通、とかも出てないよ。電通絡んでたよね、博報堂か？ どうせどっちかだから。広告代理店の天下だから。原発も政治もみんなシナリオできちゃってるから。まぁそれはいいんだけど。
「は？」ってなるよね、みんな。何言ってんのコイツ、もう終わったじゃんそのくだり、もう一回ラピュタ追いかけてどうしたいの？ 御釜にこびりついた米粒みたいな、ちょっとだけ残ってる宝でも漁りにいくつもり？ コスいヤツだな、って目で見られるよね。ロマンの欠片もないよね。
　みんなシラーッてなるし、シータとか「何言ってんのアンタ」ってもはや女房気取りで罵りかねないよね。「アンタあたいと一緒になるんだろ、その気なんだろ？ すっごいチラチラあたいのこと、要所要所でヤラシイ目で見てたじゃない。バルスの時、必要以上に手をベタベタ握って来てたじゃない。嫌なのかい、あたいと一緒になるのが嫌でそんな世迷言、言ってんのかい。どんだけ夢見る少年なんだい」って、もう呆れすぎてドーラの口調より汚く罵声浴びせてくるよね。きっと、絶対。
　俺と君はパズーとシータにはなれなかった。パズーとラピュタだった、残念だけど。でもそれはそれで、パズーはシータと、テトはロボット兵とさ、仲良くやっていくしかないじゃん。
　そこで『ラピュタ２』なんてさ、続編作ってもすっごいヒンシュク買うだけよ。蛇足もいいとこじゃん。もう終わってんのに。もう一回パズーがラピュタ追っかけて、木の根っこに引っかかってる宝石を目ざとく見つけて、ニヒッつってさ。ちびっこゲンナリだよ。
　え、知らないよ、ラピュタがあの後どうなるかなんて。まぁ、より高く昇ってくよね。え、宇宙に出ちゃうってことはないと思うけど。凍っちゃうとか？ 燃え尽きちゃうとか？ いや、たぶん

、良い感じのとこで止まって、うまくやってくと思うよ、ラピュタのことだから。みんなそこ心配してない。うん、うまくやってける。大丈夫。安心しなって。それじゃ。

　いや、もちろん、全部俺が今考えた嘘なんだけど。

# 『誘拐ネタ』※第三十二回　「恋する十四松」と**M-1**グランプリより抜粋

　今更ながらこの前のM-1で、俺はハライチのネタに興味を覚えた。知名度もあるしもうタイトルはいらないコンビな気がするけど、あの大舞台であえて、漫才でもっとも基本的ともいえる誘拐ネタに挑戦するって、ちょっとすごくない？
　んで、途中まで結構楽しく観てて、最後の方で、あ、もう一歩ってとこがあった。
「このままだと息子さんはタダじゃすみませんよ」「え、息子をどうするの？」「息子さんをそれはそれは大事に大事に育て上げて、そっくりそのままお返しします」「え、それじゃ過保護になりすぎちゃう。普通でいいんです、うちの子は普通が一番いいんです」って感じの流れで、どういう風に育てるかってなるんだけど、その後がね、結局なんかちびまる子ちゃんみたいな話になって、こたつで寝てるとこを起こさずに布団へ運ぶとかってくだりになってくんだけど、ちょっとベタなあるあるになっちゃってもったいなかった。
　想像の翼を広げて、例えばこれをさ。

「8歳でハーバード大を卒業させて、10歳でIT企業の社長にさせます」
「うちの子プレゼンしちゃうの？ 10歳で、黒のタートルネックとジーンズで？ 新製品の紹介とか、熱のこもったゼスチャーで、スタンディングオベーション浴びちゃうの？」
「12歳でNASAに抜擢され、14歳で宇宙飛行士にさせます」
「宇宙行く？ たけちゃん宇宙行っちゃう？ 家族誰一人、まだ旅行でさえ関東から一歩も出たことのないうちから、いきなりハワイやら海外ぶち抜いて宇宙飛び出しちゃう？ 宇宙からの第一声は？ ハワイよりフワフワしてますって？」
「15歳で政治家になり、16歳でアメリカ大統領にさせます」
「わーお。アジア人初の、合衆国初代、アジアンたけし大統領。町内会長でさえなったことないうちから、先祖代々小作人だった家系から、出ちゃうの。あんれま、ご先祖様、腰抜かすだあ。日本の総理大臣でさえ、ない話なのにな、ゆないてっどすていつおぶあめりかで、なっちゃう、オバマになっちゃう。あら、小浜市に連絡しなきゃ、うちが引き継ぎますって、早く小浜市に交代の電話しないと。もう混乱してワケわからない。ああ、無理、そんな子を返されても、どう接していいかわからない。納豆とか食べるかしら。金箔入れないとまずいかしら。まずなんて呼べばいいの、様？ 様つけたら足りるかしら？ 我が息子なのに、たけちゃんじゃなくて、たけちゃん様？」
「18歳でヨーロッパの王女と結婚させます」
「あ、様じゃ足りないやっぱ。たけし王子。たけし皇太子。もう閣下ね。デーモンたけし閣下ね」
「20歳で2万20歳の悪魔にさせます」
「合ってた。閣下合ってた。来ると思った悪魔の閣下」

　みたいのがほしかった。残念ながらここのくだりでちょっと失速してた気がすんだよね。ちょ

っとのひねりで決勝行けたんじゃないかと。チャレンジングだったのにもったいない。

# 『将棋の漫才』※第三十二回　「恋する十四松」とM-1グランプリより抜粋

　んで最後ね。年末に言ってた将棋の漫才の方がまずできた。わかりやすくおぎやはぎのあて書きにします。彼らの例の「～ですがなにか？」から「おぎの願いは叶えてやりてえんだよな」のとこは省略ね。

　おぎのセリフから。
「うん、将棋の棋士になりたい」
「あ、指す人ね、将棋を。羽生名人とかね」
「あ、羽生さんはね、俺ムリ。頭いいから。あんなに俺頭良くないからムリ」
「うん、それ言ったら全員頭いいよね。棋士の人。バカな人、一人もいないよ」
「そうだけど。そうじゃなくてね、よくあるじゃん漫画とかで、駒の声が聴けるようなさ。頭で考えるんじゃなくて、直感で、駒の声を聴いて将棋を指す棋士になりたいの」
「え、どんな風に聴くの？」
　ここで、お騒がせ号泣議員の物真似のくだりをいれてもいい。
　次やはぎから。
「やめよ、そういうの。時事ネタは。爆笑問題になっちゃうから」
「とにかく俺が駒の声を聴く棋士になるから。やはぎは王手してきてほしいの。それを俺が駒の声を聴いて、逆王手にするから」
「わかった。王手って、次に王を取って勝つぞってことね。それを切り返しながら、逆に敵の王をとるぞって、一番難しいヤツね。んじゃ、王手！」（王手のゼスチャー）
「え、そこ王手？」
「うん、だって王手しろって言ったでしょ？」
「あちゃー。参ったな、ヤバいな。参りました」
「待って、参らないね。そこ参らないでね。まだ聴いてないし、駒の声」
「あ、そっか、聴くの忘れてた。俺、直感の棋士だから、結構いろいろ早とちりしちゃうから。今朝の朝ごはんも目玉焼きにソースかけて、あれ、醤油だと思ったらソースだって、でもうめえっつって」
「待って、そのくだりいる？」
「うん。芝居だから。直感の棋士はね、ちょっとおっちょこちょいだから。そんくらいじゃないと駒の声なんて聴けない。バカだからさ、ある意味。何本かネジ外れてないと駒の声なんてバカバカしくて聴いてらんない」
「それ自分で言うんだ。でもおぎ一流の演出なんだね。うん、じゃ俺は触れない。おぎの演技プランを尊重するよ」
「よし、聴いてみっか。どれどれ、教えてちょ。我が駒の精霊たちよ。話してミソ」
「うん、確かな手ごたえのバカだね」
「なになに、うんうん。あいわかった！」

「あ、わかったの？」
「うん、あのね、今やはぎ、これ金で王手してるじゃん。この金、さっき俺から取ったヤツだよね。4五歩から」
「そうだね」
「この金ね。泣いてる」
「え？」
「だってね、この金は、3八飛車から王を守ったりね、逆に7二角から攻めあがったりね、陰に陽に我が軍を支えてきたワケじゃない。それがさ、ぱっと一回やはぎに取られただけで、逆に我が王に王手するようなね、そんな子じゃないワケ。謀反なんて考えてもなかったのに、それが悔しいって。だから、こうね。逆王手！」（目の前の駒をクルッと回転させ味方にするゼスチャー）
「え、なにその手？」
「（女性の声色で）後手、3二金、ひっくり返す」
「ないよね。そんな手は。それルール変わっちゃうから。将棋のルールじゃないから」
「だって駒の声なんだから仕方ないじゃん。もうヤダって。だったら実家帰りますって言ってんだから」
「言ってない。いやたとえ言ってたとしても帰さない。反則だから。ひっくり返すのなしだから。声を聴くにしても、ルールの範囲内でだよ。いい？」
「でも、駒あっての将棋だからね！ やはぎこそ、もう駒が泣くような手は打たないでよ！」
「あ、俺の方が責められるんだ。この期に及んで。じゃ、気を付けるだけは気を付けるよ。もう一回。王手！」（王手のゼスチャー）
「あちゃー。参ったな、ヤバいな。参り……」
「そこも省略ね」
「はいはい。んじゃ、（駒の声を聴くゼスチャー）なになに、はいはい、そうですか。あいわかった！」
「え、今度は何？」
「この金ね、さっきからなんで謀反して王手ばっかしてる困ったちゃんなのかわかりました」
「いや、王手してっておぎが言うからでしょ？」
「ちがう。やはぎ、その前の手で俺から飛車と角取ったじゃん」
「あ、そうなんだ、飛車角取ってんだ俺。てかその前に超弱くない？ 駒の声を聴く棋士。もう金以外に飛車角まで取られて、既に負けたようなもんだよねそれ」
「うん、それがね、あの飛車と角は、この金の父と叔父にあたる駒だったんだよ。それでね、それが人質、あ、駒質に取られてるから、この金は泣く泣く俺の王に王手してるって。そういう複雑な家庭環境に育った子だったんだね。不憫な金だよ」
「いや初耳だよ、俺そんなつもりないし。駒質っても初めて聞く単語だし」
「でもね、我が王のために、駒質の飛車角がついに覚悟を決めたって。だから、こうね。逆王手！」（右手でズバッ、左手でズバッ、斜めに斬るゼスチャー。それから真ん中の駒を逆向き

にするゼスチャー）
「なにその手！」
「（女性の声色で）後手、3二金、泣いて飛車角を斬り、ひっくり返す」
「おぎ。わかった」
「なに？」
「おぎに棋士は向いてない。目指さない方がいい。俺と漫才やるんでいいじゃない。それが一番うまくいくよ」
「そっか。じゃ、あんたとはやっとれんわ」
「ありがとうございました～」

# 『労働と努力』※第三十三回　『最低。』と最高。のあいだより抜粋

　村上春樹つながりで最後に書くんだけど、『ノルウェイの森』で「労働（苦労）と努力は別物」ってニュアンスの話があったけど。
　考えたんだが、労働と努力は確かに別だけど、どっちも大事だなって思う。努力が上で、労働が下ってことじゃない。
　つまり、RPGで言うところの経験値と物語の関係で例えるとわかりやすい。
　経験値を上げれば、よりレベルが上がり、強い敵も一撃で倒せるようになる。ただそれだけでは、冒険は進まない。
　冒険を進ませるためには、レベル上げ以外に、町の人の話を聞き、依頼を引き受け、様々な場所へ訪れ、謎を解いていく必要がある。
　経験値を上げることは、作業であり、苦労であり、労働だと定義する。
　一方、謎を解くことは、思考であり、勉強であり、努力だと定義する。
　この二つがかみ合わなければ、エンディングは来ないし、姫も助けられない。人生というRPGを思い通り進めるためには、労働と努力がタイヤとエンジンの役割を果たすはずだ。

# 『性のボヤ騒ぎ』※第三十四回　『性の歴史』とお茶の間にある非日常より抜粋

　おこがましくも大上段で語らせていただきますけれども、今、文化にとって一つの課題はさ、例えば、エログロをやらない表現（テレビや新聞など）と、際限なくエログロに特化した表現（ネットとかAVとか）が、グレーに混ざらずシロとクロに偏りすぎてるってことかもしれない。
　本来、エログロは日常にあるグレーな部分なのに、例えばR指定とか「これはそういう特集です」ってマエがないと、苦情が来そうって自粛感がどんどん強くなってる。
　いや、もちろん昔からテレビだってエログロは深夜に放送してたし、真昼間から「明日もセックスしてくれるかな~？」っていいともろーな茶の間ではなかったよ。それに現在は、性欲についての真面目でオープンな言葉も増えたと思う。
　ただ、表現が許される場ではとことんクロだけど、許されない場ではまったくのシロ。そういう二極化ルールが現代社会の特徴かもね。子供の遊び場とか。前にも書いたけど、例えば裸族も。もう地球上に裸族はいないらしいけど、服って健康上の理由以外に、日常から性を切り離すって意味合いは強いだろう。
　こういう二極化は結局、洗練化と言い換えることができると思う。台湾のバイクの例でもさ、バイクは道路だけ、歩行者は歩道だけってルールはつまり、交通の二極化であり洗練化だろう。
　そして洗練化ってのは平準化ってことでもあるはずだ。自文化の常識で他者を批判する意味合いの強いSNSの炎上現象も、世界中で見られてる。平準化がイナゴのように世界を侵食してる。
　あ、そういや「炎上」って言葉は暴走族とかと一緒でちょっとカッコいいし、現実には火も煙もまったく出てないから、違う言葉にした方が俺はいいと思う。「誰が何人」って明確な数値的定義もない曖昧な表現だし。既知で地味に「ボヤ騒ぎ」でいいんじゃないかな？
　世間様は幻の炎を懸命に煽って「炎上」って騒いでるけど、視聴率やら売り上げに必死なマッチポンプ式ネタ作りにはもう飽きたよ。

『ポケ檬、リリースだぜ！』※第三十五回 『イグジット・スルー・ザ・ギフトショップ』と「グラフィティ**GO**」より抜粋

---

「ポケモンGO」の最大の楽しみ方は、キミが考えた（超人や）ポケモンのぬいぐるみ（やキン消し）を街中に勝手に配置してくるってオチじゃない？

　梶井基次郎『檸檬』に倣って、「ポケ檬、リリースだぜ！」ってれっきとした文学活動を言い張れるし。

『これは本ではありません。檸檬です』※第三十五回 『イグジット・スルー・ザ・ギフトショップ』と「グラフィティGO」より抜粋

　バンクシーの表現はゲリラ的で、匿名性が高く、毒とひねりがありつつも、ヘイトではなくユーモアもあって、俺もこんな風に書きたいなと理想に思う点が多い。
　たとえば、自分が書いた渾身の一冊にラベル付けて図書館の棚に勝手に並べたり、それっぽいカバー付けて本屋に勝手に平積みしちゃう人がいたら、それはそれで面白い。怒られた時はもちろん、「これは本ではありません。『檸檬』です」ってとんちで切り返せば、店主もきっと笑って「檸檬とは痛快痛快。通報するから泣き言は警察で言いなさい」ってなるよね！

『イグジット～』って映画も、タイトルからしていろいろ憶測を呼ぶ、ストレートじゃないひねりの効いた作品だった。
　俺はほとんど行ったことないけど、海外の美術館には出口前にこういう案内文句があるって話でしょ？ 日本でももちろん、美術館の出口前にはギフトショップがあって、展示作品にちなんだ画集やポストカードの他、Tシャツやら文房具やらお香やらガチャガチャやら、オシャレでそれっぽいもんがいろいろ置いてあるよね。
　これって下手すると、展示する美術館側がすでに作品自体を「ギフトショップ用の宣伝」くらいにみくびってんじゃないの？ 「はい。あなたがさっき鑑賞してたのはこの絵ですよ～。評価はともかく記念にポストカードの一枚でも買って帰ってね～」って。
　あるいは、「美術館はボーっと絵を観て適当な土産買って帰るだけの退屈な場所か？ だったら出て行きな。俺は自分が描いた渾身の一枚を勝手に飾ってから帰るぜ」ってバンクシーからのお誘いかもね。

　そういう「自分だけキレイなトイレ」に忍び込んでこっそり落書きするような動きとして、「バンクシーGO」ともいえる『バンクシー・ダズ・ニューヨーク』って映画が上映されたり。または、「ポケモンGO」を下敷きにした「シリアGO」って活動も、まさにグラフィティの手法で戦禍を伝えようとしてる動きだ。
　だからそのうちどっかに「グラフィティGO」ってサイトが立ち上がる気がする。バンクシー他、国際的に名の知れてるアーティストたちが世界の名所、スフィンクスとか自由の女神とかに、ネット上でグラフィティ描いたりとか。可能なら実際にそのグラフィティを現実にも描きこむとか。あるいは有名な人とかが有償で、ここの壁にも書いてくれって要望を投稿したりとか。

　単なる「ヘイト＝害」や単なる「LOVE＝無毒」を超える表現が望まれる場所が確かにある。例えば今回の表紙の「メモ欄」とかの場所にね。そういう意味で「メモ欄」を使ってね。この流れで原発や汚染水タンクにも何か描いたら面白いと俺は思うけどね。

『ニンジャソウルのセンス・オブ・ワンダー』※第三十六回 『ニンジャスレイヤー』と「ブロークン・ハート」より抜粋

　たとえば、同じ野球を題材にしたマンガでも、『巨人の星』と『タッチ』では物語も表現のされ方もだいぶ違う。
　一番比較しやすいのはクライマックスのシーンだ。クライマックスとは、物語の一番盛り上がる転換点であり、『桃太郎』なら鬼を倒す場面だ。
『巨人の星』のクライマックスはたぶん、花形と星が野球で対決するシーンだろう。あんま知らないで適当に書いたけど、だいたい合ってるはず。同じ原作者の『あしたのジョー』で言うなら、力石とジョー、またはホセ・メンドーサとジョーの対決とかがクライマックスだろう。
　だって野球やボクシングが題材なんだから、対決シーンがクライマックスで当然じゃん、と考える人に向いている作品だ。

　じゃ、『タッチ』のクライマックスはどこか。達也と新田が野球で対決するシーンだろうか。残念ながら一番盛り上がるのも、物語が劇的に転換するのもそこじゃない。「懐かしアニメ一挙大放送」みたいな番組で女子の歓声が上がるクライマックスはもちろんラスト、達也が南に告白するシーンだ。野球の勝ち負けよりも恋の告白の方が、主人公である二人の物語を劇的に転換させる出来事だからだ。
　つまり『タッチ』は野球を題材にしながら、対決よりも日常に重きを置いている作品だ。人間は日常を生きているのだから、対決よりも日常こそがクライマックスで当然、と考える人に向いている作品だ。（これはつまり、「スポーツ選手にとって引退した後の方が、選手でいる時間よりもずっと長い」系の話にも通じる）
　長いけど、ここまでが前フリね。

　では次に、『ガンダム』とテレビ版初代『マクロス』のクライマックスを比較してみると、その違いが鮮明になる。
『ガンダム』のクライマックスと言えばまさにあのシルエットだろう。
　つまりガンダムとジオング、アムロとシャアの最後の対決だ。ロボットSF戦争アニメなんだから、ヒーローとライバルがロボ（MS）で対決するのが当然クライマックスだと考える人に、『ガンダム』は向いている。

　では、『マクロス』のクライマックスはどこか。
　最も大きいクライマックスが、「愛は流れる」という敵のボスを倒す回だ。知らない人は当然、ロボットSF戦争アニメなんだからヒーローがラスボスを倒すと思うだろう。しかし、ラスボスはマクロスという戦艦があっさり倒してしまう。
　じゃ主人公である一条輝はその頃何をしとるのかというと、人類が滅亡するかもしれない戦闘の前にまずヒロインであるミンメイに告白して失恋、さらにミンメイのキスシーンにショックを

受け被弾し早々に戦線離脱、大破した機体で地球上をフラフラしてたら、もう一人のヒロイン・早瀬大尉をたまたま見つけて救出、操縦席で彼女を膝の上に乗せ肩を抱きながら、これからどうしよう、もう地球には私たち二人しかいないのかな、それでもいいじゃない一人ぼっちじゃないんだから、とかってこの期に及んでまでイチャイチャ、そこでぼんやり空を見上げると母艦が地球に還ってくるのを見つけて、よかったって一安心して笑う。
　これが『マクロス』のクライマックスだ。つまりわかりやすく言うと、『マクロス』はロボアニメ界における『タッチ』だ。戦争の行方よりも恋愛の成就の方が重要だから。

　かく言う俺はもちろん、『ガンダム』より断然『マクロス』派だ。当時のアニメ雑誌やら古本屋で買い漁ったし、「3倍好き」だからこそこの酷い言いぐさってことはわかってほしい。
　つまり『マクロス』とは、そもそも戦闘ではなく日常がテーマの物語だ。
　さらに、この回までがヒーローとヒロインの成長物語であり、それが一段落した結果、この後に続く回はもう一人のヒロインであるミンメイの成長物語へと移っていく。
　しかしことここに及ぶと、（大人の都合で延長されたってこともあり）ロボットSF戦争アニメを求めるファンにとっては蛇足以外の何物でもなく、非常に評判が悪い。
　だがそもそも『マクロス』とは、半分以上素人でアニメやアイドル好きな学生たちが、ノリと思い付きで作った当て馬の企画だったはずだ。暗い遊びをしてた彼らが、自分たちの好きな物を詰め込んで精一杯背伸びした結果生まれた（デストロイド）モンスターだ。むしろこっち方向こそが正解であり、純粋なロボットSF戦争アニメを求める人の方こそ勘違いだから、よそに行った方がいい。
　当時のアニメ雑誌では映画版『ナウシカ』の頃の宮崎駿に、「あれ、マクロス戦艦の中の街って、食糧とかどうなってるの？」って細密なSF考証について質問され、河森さんが「ベトナム戦争時の米兵も生死をかけた最前線なのに、缶詰を腹いっぱい食べたり音楽を聞いたりしてたのを見てましたので、そういう軍隊をイメージしてる」的な言い訳をしてたけど、そういう細部は普通なら大事ではあるけど、こと『マクロス』に至っては小事で大丈夫だ。敵の戦闘ポッドの大きさが変とか、巨人にまつわる設定の甘さとかも大概問題ない。

　たとえば、巨大な戦艦に封じ込められて襲い来る敵と戦う様こそ、この島国に生きる我々を投影したメタファーだとか、適当にハッタリかましときゃいい。
『マクロス』の核心は、戦闘や悲劇以外の「日常で戦争を描く」というアニメ表現の革新を、30年前に確信犯的にやってのけたことだろう。
　いいんだよ、アニメでフィクションなんだから。ところどころパロディ入れたり、力尽きて色が塗れなかったり止め絵になったり絵荒れが酷くても、逆にふざけてそれも笑いにしちゃえばいいんだよ。芯であるSFのセンス・オブ・ワンダーさえしっかり通ってればいいんだよ。そういう強いメッセージを俺は『マクロス』から勝手にもらった。
　そういう意味でも、俺にとって『マクロス』は初代テレビ版が一番だし、俺にとって神回はラスト近くの「ブロークン・ハート」だ。『マクロス』のテーマの一つである「文化とは何か？」

という問いにも面白く迫ってるし、ラストは絵荒れの酷さをたぶん絶対逆にギャグにしちゃってる。
　ヤキモチ焼いた早瀬少佐が、ミンメイとイチャイチャしてる一条クンを意地悪く引き離した後すっころぶミンメイを見ながら、のぼってくる朝日に満足げな微笑を返すシーン、あれ「ダウンタウンのごっつええ感じ」の「連続テレビ小説 木瓜の花」ってコントそのままだ。

　んで俺が気になったのは、この回の最後の方に一条クンがミンメイに向かって走ってくんだけど、その時の笑える走り方と、テレビアニメ版『ニンジャスレイヤー』のナンシーさんが登場時によくやるポーズがそっくりだっていう。これは本当に俺の妄想だけど、うすた京介『マサルさん』とかにも通じるニンジャソウルがある。
『ニンジャスレイヤー』ってギャグもシリアスもとにかく荒唐無稽な物語をアニメで表現するためには、あの「割り箸にくっつけた絵を動かしました」的CG表現が一番ベストだったと思う。原作は全く読んでないけど。
　そういう意味で、フィクションの内容にふさわしい表現を模索したテレビ版初代『マクロス』を『ニンジャスレイヤー』がリスペクトしたとしても、特におかしくないと思うんだ。
　この流れで行くと、アニメ映画版『ニンジャスレイヤー』は逆に、口元が「あいうえお」の言葉通り緻密に動くくらいであってほしいね。もちろん映画版『マクロス』に倣って。

# 『ドラゴンボールGO』※第三十七回 「はみだしウマシカさん　その１２」より抜粋

　ドラゴンボールはこの世にたった七つしかない。だから「世界中に散らばったドラゴンボールが本当に七つ全部集まるのか、実際にゲームを公開して実験したい気持ちもありました」って、俺の妄想の中のバンダイナムコの人が言ってるよ。

　自キャラはやっぱ、ドラゴンボール初期から後期まで好きなキャラクターを選べるのがいいな。
　主なゲーム性は、すれ違ったプレイヤーとの対戦だけど、「ポケモンGO」のジム戦と一緒で、相手のキャラクターを借りるだけでCPとの対戦がいいと思う。そこで勝つと相手のアイテムから一つ、好きな物を奪うことができる。だからもしドラゴンボールを持っている人が負けたらもちろん、それを奪われる可能性は高い。すると、ドラゴンボールがプレイヤーの手から手に渡って世界中を移動する可能性がある。

　対戦はジャン拳じゃないけど、できれば課金に左右されない三すくみくらいがいいなぁ。例えば、気合弾はキックに勝つ。キックはパンチに勝つ。パンチは気合弾を跳ね飛ばして勝つ。くらいのね。
　んじゃ、どこで課金するのかっていうと、主に道具を入れる袋だね。とにかく破れやすい袋だから、何重にもしておかないと道具がすぐ落ちちゃう。特にドラゴンボールを入れると1分くらいで破けちゃうから、最大で100枚くらい袋を重ねたりしてね。さらに予備の袋を入れるための大きな袋も課金にしたりね。

　あと、現実的な落としどころとしては、ドラゴンボールが七つ集まって神龍が出てきたら、叶う望みは5択くらいから選ぶのがいいかなぁ。
「一度でもドラゴンボールを手にしたプレイヤー全員」に、「課金アイテムをプレゼント」とか「レベル上げる」とか「パフパフ画像を送る」とか、そのくらいの温度にすることでゲーム性を調整したい。
　つまり、「俺がドラゴンボールを七つ集めてやる！」ってゲーム性じゃなくて、「誰か少しでも世界を飛び回りそうな人にボールを託して、七つ集めてもらう」って、みんなで協力するゲームがいいんじゃないかな。
　もちろん過去に誰が何個ボールを集めたか、ボールがどういうルートで七つ集まったかって、履歴は振り返れたほうが面白いと思う。

　でもやっぱ一番はじめにドラゴンボールがある場所は、チョモランマの頂上とか、深海に住む巨大イカの腹ん中であってほしい気はする。まぁそれは現実的じゃないだろうけど。

# 『リアルなゲーム表現』※第三十八回 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と『アウター・ワールド』再びより抜粋

　その前に今さら『アウター・ワールド』の魅力について（蛇足だけど）、前回は俺がどこに衝撃を受けたか具体的に書かなかったから、ちょっと抽象的だったと思う。Uには昔言った気がするけど、もう一回改めて書くよ。
　ただ『アウター～』って、気付いたら2012年にMOMAって美術館にコレクションされてたりすごい称賛されてて、ウマシカな俺ごときがもはや書くまでもないね。

　ゲームってのは長いこと、基本的にはクリアする達成感を味わうのが目的だった。
　もちろん最近のネットゲームはチャットとかが目的になったりもするみたいだけど、それでもゲームなんだから敵を倒すとか、対戦するとか、クリアするのが当たり前かつ一般的な目的だろう。
　でも『アウター～』の喜びはクリア以外に、本当にしたいと思ったアクションがゲーム内で出来たって驚きにある。これは前の『タッチ』と『巨人の星』の違いでも書いたけど、「ゲームを通して何を表現するか」ってテーマになるはずだ。

　具体的にどういうことか。
『アウター～』は基本、マリオと同じ横スクロールアクションで、ボタン配置もジャンプと、アクションボタンの二つでほぼ一緒だ。途中で銃を拾うと、それを構えるのもアクションボタンだよね。
　普通のゲームなら、アクションボタンを押せば弾が自動的に出てくる。フラワーマリオならファイアボール、ロックマンならビームが出てくる。ゲームだから当然、何の疑問もない。
　でも、『アウター～』はアクションボタンを押すと、まず銃を構えるだけだ。そこでボタンを離せば銃を構えた姿勢で固定される。更にアクションボタンを押す長さで、発射、バリア、ため打ち、に変化するシステムだ。
　この「銃を構えるだけ」というアクションがすごく気になってた。他のゲームにはまずないアクションだったから。子供が玩具のピストルを構えて「手をあげろ」ってカッコつけるみたいに、「これで本当に敵が怯えて手をあげたら面白いな」って序盤から思ってた。

　それがゲームの終盤で、本当にその場面がやってきた。過去プレイしたゲームにそんなリアリティはなかったし、もちろんネタバレになるから説明書にもない展開だ。
　例えばマリオがファイアをボンボン投げても、クリボーはただボーっと歩いて火に入るからクリボーだったはずだ、よね？ ところが、マリオがファイア構えて脅すと、クリボーが手をあげるゲーム。それが『アウター～』だった。
　もちろん他にも、（Uが好きな）初期メタルギア（MG）のステルスアクションとかリアリティのあるゲームは知ってたけど、まさかマリオと同じ横スクロールのスーファミでこういうアクシ

ョンができるとは思わなかったよ。

　更にこの後PS2のMGS2では、敵のタグを集めるために銃口を向けて脅す、ってアクションができるようになることを思えば、『アウター〜』の表現がいかに早かったかが分かるだろう。

# よりぬきウマシカさん ～なめあいの妄想編～

http://p.booklog.jp/book/89698

著者：弦楽器イルカ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/89698

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/89698

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ